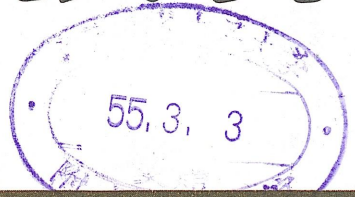


家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

3



第七十九卷 第三号 日本幼稚園協会



好評発売中!!

保育者にとって必読の書!!

# 絵本 その楽しさと指導

館 紅・著

B6判・180頁

定価850円 円160円

~~~~~ 内 容 ~~~~~

第一編

子どもにとって絵本とは

第二編

絵本の見方と扱い方

第三編

絵本の展開



本書は「なぜ、子どもたちに絵本を与えるのか」「絵本によって何が育つのか」について豊富な事例をもとに論じています。

保育の中での絵本の位置を考える時には、その文学性や美術性だけではなく、子どもの自主性や思考力、判断力、情操など基本的な態度が絵本を通してどのように育てられるのかについて述べられるべきだと思います。

本書は保育の場で絵本を活かすには、どんな絵本を選んで、どのような与え方をしたらよいのかなどの問題をとく手がかりになるものです。

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

**フレーベル館**

# 幼児の教育

第七十九卷 第三号



幼児の教育 目次

—第七十九卷 三月号—

© 1980  
日本幼稚園協会

表紙 駒宮録郎  
カッタ 中島英子

彼らは生きていく矢として放たれる……………森田宗一(4)

幼稚園の定員について考えよう……………山下俊郎(6)

教育学的関係と子どもの発達……………E・フェルメール(10)

私の幼児教育論……………河合英二(18)

私の保育……………松原美智子(22)

◇映像からの接近◇……………(28)







「送る」という気持……………村石京子…(29)

放つ……………水藤昭子…(32)

陶人形に託す……………可部美智子…(34)

「児やらい」に想う……………土山忠子…(36)

卒園児を送り出して思うこと……………紀田典子…(38)

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——(その十八)……………海老沢敏…(40)

★倉橋賞受賞論文

保育者養成におけるシミュレーション的手法の利用……………阿部智江…(48)

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(三十二)……………津守真…(59)

## 彼らは生きている矢として送り出される

森田宗一

“人間は、その発達の過程において、人類の歴史を圧縮したかたちでひととおり体験するものだ。母の胎内を出てから、時折大きな起伏をもつて母から離れ、成長し、歴史のたて糸を自ら織りなして行かねばならない……。”これは発達心理学の権威アーノルド・ゲゼル博士の学説の根底をなす考え方である。

たしかに、子供は一歳頃ようやく二本の足で立ち手を使う頃から、三歳、六歳、十三、四歳、そして十七、八歳の大きな成長期の峠を経て、母なる大地から分離し、親のもとを旅立って行く。そういう峠路にはことさら母子には“別れのつらさ”というべきものがある。それを成長の喜びとしようかとめ、見守りつつ子供の成長（旅立ち）を見送り、手もとから放してやるかどうか、聡明な母親の心がまえでなくてはな

らない。この頃は、子離れしない親、母離れしない子供が多く、成人になっていろいろ問題をおこす原因となっている例が多い。

“ふるさととは遠きにありて思うもの”。母はふるさとである。親から放たれ送られ、母というふるさとを離れることは、人間としての新しい出会いの始まりなのである。親子の幅のある人生の友としてのつき合ひも、それでこそ豊かに成長する。その人間成長の道理（ことわり）が、今日あまりに忘れられているように思われる。幼少時における母子の濃密な肌ふれ合う愛情関係が大切なことは、いうまでもないが、子供の発達における母子分離（セパレーション）、親の側からいえば、“放つ、送る”ということこそ、親と子のそれぞれの豊かな成長の鍵であると知らねばならない。

この頃の未成熟な中高生の非行、ママとボク手を結び合  
い父を無視”などという母子ベッタリを思わせる川柳。その  
はては大学入試にも卒業式にも母がつきそい、やがて結婚し  
た息子の新婚旅行にまで母親がついて行くという風潮は驚く  
べきものである。最近の離婚の事件にも、そうした理由から  
申立てられる男性の例が少なくない。高校生の家庭内暴力の  
ケースなどにおいても、幼少の頃から母子の分離がなく、父  
親との芯のあるつき合いの稀薄な者が非常に多いようだ。

私事で恐縮だが、五人の子供のうち末から二番目の娘が最  
近、アメリカの大学院に学ぶうちあちらの青年と結婚した。

その結婚式に参加しているのをご学んだ。娘は数年ま  
え児童文学修業のためメキシコに向い、メヒコに二年、その  
後アメリカ・カルフォルニア州に定住。アメリカ人は勿論、  
インディアンの人々その解放運動や平和運動に参加している  
日本の尼僧の方々などと親しくなり、そういう生活の中で日  
本やアジアに深い愛情を持つアメリカ青年と相識り結ばれる  
ことになった。

メキシコへ発つ娘の行手浄むがに

今宵淡雪しみじみと降る

これは彼女が日本を離れる時、送別の夜、不安と祈りの気  
持でつくった私の歌である。しかし私の思いをはるかに越え  
たところに娘は巣立ち成長しているのを知った。その娘を通  
じて未知の世界・未見の人々を知り多くのことを学んだの  
は、父である私であった。

「放つ、送る」という言葉とともに、私が今深く思うのは、  
「あなたの子どもは明日の家に生きている」というレバノン  
の詩人カーリル・ゴブランの詩である。

彼らは人生の希望そのものの息子娘である。

彼らはあなたを通じて来るが、あなたから

来るのではない。あなたとともにいても、

あなたに所属していない……

彼らの魂は、明日の家に住んでいる。

あなたは、彼らをひきとめておいてはいけな

い。なぜなら、人生はあともどりせず、昨日の

ところにとどまってもいないから。

あなたは弓で、あなたの子供は、それから生きている

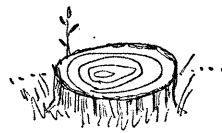
矢として送り出される。

(東京家政大学・元家裁判事)



## 幼稚園の学級定員について考えよう

山下俊郎



昨年九月の日本保育学会会報第54号の巻頭に載せたわたくしの小論「学級定員」が、本誌の編集者の目にとまり、幼稚園の学級定員についての論考を幾人かの筆者に書いて戴くという企画が樹てられ、その最初の火つけ役をわたくしにして欲しいという要望が寄せられて、ここにペンを取ることになった。

本誌の読者の多くの方々は日本保育学会の会員になって居られると思うので、その方々はすでにわたくしの小論を

読んで居られるとは思いますが、学会会報でわたくしの述べた要点を簡単にくり返して再論することから始めよう。

わたくしが会報第54号で学級定員の問題を取りあげたのは、昨年八月二十二日に文部省の発表した「第五次教職員定数改善計画」——その中心に小、中学校における「四十五人学級」すなわち現在の四十五人を四十人に減らして、言う所の「行き届いた教育」を行なうことが含まれている——を九年にわたって実施することになっているのに対して、もっと短期の、すなわち五年にせよ、せめて七年にせ

よとの主張が日教組によってなされているとの報道が、朝日新聞に載せられていたのを取りあげたわけであった。

この四十人学級については、すでに一昨年すなわち昭和五十三年春に当時の内藤文部大臣と日教組の榎枝委員長との間に諒解が成立しているもので、当然実施されるべきであることは当然である。このことを取りあげてわたくしは、昨年の会報54号の前に、第52号の「年頭雑感」と題する小論でもすでにふれている。

この二回にわたってわたくしが述べた要点は、小、中学校の四十人学級はもちろん当然の教育的要求であって、それを日教組が取りあげその重要運動のトップに取りあげたことは大変結構である、ただしわたくしに言わせるならば、今頃になってようやくこれを取りあげるといふのはあまりにも遅すぎるではないか、もっと早くから教師の教育的良心に訴えて動くべきであった大切な問題だというのがわたくしの真意であったのである。

しかし、この問題を取りあげたのは、わたくしに取っては、幼児教育に関して物申したいからであった。マスコミは右のように小、中学校の学級定員の問題は、日教組が遅

動の焦点に取りあげたからこれを報道したのであるが、幼稚園の定員問題については、わたくしの見た限りにおいてはどこにも取りあげられていない。新聞、ラジオ、テレビのいずれも取りあげていないし、とくにわたくしが残念に思うのは、保育者が読むであろういわゆる月刊保育誌のいづれを見ても取りあげていなかった。わずかに一つだけ、毎日新聞に主婦の声として、自分の子ども通っている幼稚園のクラスが六十人という驚くべき数である実状を同新聞の「アクションライン」で訴えているのを見たのが、唯一であったことを、わたくしは会報第54号で述べておいた。

このような状況であるので、わたくしは日教組に対しては、小・中学校の学級定員については前に述べた通り当然のことであるが、小学校の下には幼稚園がある、幼稚園の学級定員は幼稚園設置基準によって四十人以下を原則とするとして、現実にはここに引用した主婦の述べているような例もあることを考えてもらいたい、当然の段階として幼稚園の幼児は次には小学校にあがるのだから、この子ども達のことを忘れてもらっては困る、日教組にはたしか幼年教育部会があったはずだが、この部会は眠っているのか、目をさまし、動いてもらいたいと、毒づいたのであ

た。

今まで述べた所は前にわたくしが述べたことの反復で、すでにこのことだけで与えられた紙数の半分を費してしまつたが、一応の諒解を讀者諸兄姉に得て頂いたことと思ふ。ところで、さきに述べたように月刊保育誌のいずれもこの定員問題を取りあげていなかったことをわたくしは指摘したのであるが、ようやく十二月号の「保育とカリキュラム」(ひかりのくに社刊)の保育ニュースの欄に取りあげられているのを、わたくしははじめて見た。それは文教担当記者西尾明俊という署名入りのニュースであるが、これによると日教組が幼稚園のことを無視していたのではなく、昨年七月の定期大会に「公立幼稚園教職員定数法案」を提出、現在下部討議中で、昭和五十五年の大会で決定することになつてゐる由である。このような報道が昨年十二月号の雑誌上で始めてなされて居り、すでにふれたように新聞、ラジオ、テレビ等には、少なくともわたくしの目と耳にふれる限りにおいては全然世の中に知らされていない。わたくしはこのことに就いてはマスコミ当事者、ジャーナリスト達が幼児保育というものに対してすこぶる薄い関心しか持

つていないことの現われであることを誠に残念に思う。

いわゆる幼児保育論議や誤つた先取り教育的業者の大きな広告をのせている新聞紙は甚だ不都合だとわたくしは考へる。わたくしは、日教組と直接のつながりを持たないから、小・中学校のことはかり報道されていて、幼稚園に關することが検討されていることを全然知らないもので、前に述べたような毒舌を吐いたわけである。マス・コミの幼児教育軽視と日教組のPR不足は共に責められるべきだとわたくしは考へる。

現在このような状況下に置かれている幼稚園の学級定員問題は、小・中学校よりも先に、保育者が、自分達の保育し、またこれから保育するであろう幼児達の幸せのため、真剣に研究し、運動すべき問題であることを、わたくしは保育者ならびに保育に關連を持つ人々に強く訴へたい。保育学会会報第54号にのせた拙文に対しては、北須磨保育センターという周知の施設を運営して実績を挙げて居られる兵庫女子短大教授屋光雄氏から同感のお便りを頂き、この問題を推進する行動を起そうではないかとの御提唱をも受けている。この度、ようやく「幼児の教育」誌上でも取りあげられるようになったので、いろいろの方の御



意見が連載されるであろうから、是非この問題を一步でも二歩でも前進させるようにしたいものだと思う。

幼稚園がわが国に出来てからすでに二百年たち、今年は今も百三年目に入るといふのに、このような重要問題が放置されているのは誠に情ない限りである。幼稚園の一学級の定員は四十人以下を原則とするという基準は、明治三十二年の幼稚園保育及設備規定以来のもので、翌三十三年小学校令の中に包摂され、その後の大正十五年の幼稚園令にもそのまま残り、第二次世界大戦後すなわち現在の学校教育法においてもそのまま残っているものである。これが甚だ望ましからざる幼稚園定員の在り方であることは、いやしくも幼児保育に関心を持つ人であつたら誰でも感じしていることである。

わたくし達は、今の定員が当然減らされなければならぬことは明白な事実であると思う。しかも、幼稚園には三、四、五歳児という三つの年齢階級の幼児がいるのであるから、年齢によつても異なる定員が定められなければならないことも、発達しつゝある幼児ということを考えると当然考えられるべきことである。そしてその適正な数とい

うことは、単なる思弁の結果で割り出されるべきものでなく、どこまでも実践による研究の結果によつて定められるべきものである。実証的研究の基礎づけが望まれる所である。

さらに、現実の問題として幼稚園の七割が私立幼稚園であること、幼児の絶対数が現在次第に減少しつゝあることなど、定員減に伴う経営の問題が一つの大きな問題である。さきにふれた西尾氏の保育ニュースによると、その時引用した日教組案は公立幼稚園に関するもののようにである。公立の場合、定員減少は私立にくらべるとやり易いであらうが、それでも中々困難であることは諸般の事情から考えて察知される。これが私立の場合はさらに問題が大きい。その中であつて日私幼で検討の組織を作つて居ることは高く評価されていいと思われる。

わたくしは、ここにわたくし自身の具体的な提案を敢えてしなかつたが、是非、保育者と保育にかかわりを持つ方々に研究を進めて頂きたいと、心から切望するものである。

(創価大学)

# 教育学的関係と子どもの発達

E・フェルメール

はじめに

真行寺 功

フェルメール女史 (Edith A.A. Vermeer, 1908, 5, 17-) はオランダのユトレヒト大学社会科学部教育学科発達心理学研究室の助教授であったが、一九七五年に退官して現在は若い学位取得志望者の個人指導をしている。彼女の研究領域は専ら「遊び」に限られているが、その背景には幅広い教養と子どもの深い観察経験がある。彼女はユトレヒト大学でランゲフェルト博士とバイテン

ディク博士の下で学び、遊びの研究で学位を取得した。これは『遊びと遊び教育学の問題』<sup>註1</sup>として公刊され、オランダのみならずヨーロッパ各国で高く評価され、ドイツのショイヤーやフリットナー、リュッセル、フランスのシャトーなどと共に現象学的立場からの遊び研究の第一人者となった。<sup>註2</sup>彼女の立場は現象学に基いているが、特にメルロ・ポンティの現象学に依拠している。それゆえ彼女の立場を理解するために、メルロ・ポンティの著書を読むことを読者におすすぬ<sup>註3</sup>。幸いなことに彼の著書の多

くをすぐれた日本語訳で読むことができるし、解説も多くなされて  
いるからである。というのも、現象学はきわめて難解で、ここ  
に訳した彼女の文章も正確に理解するには予め現象学についての  
理解が必要だからである。例えば関係とか対話、文化的世界、展  
望、身体、越境（自然な世界を越えること）といったことはの意  
味を正確に理解しておかないとこの文章の理解が難しいとおも  
われるからである。

ここで読者の理解を助けるために、現象学的アプローチの特徴  
を幾つか挙げておこう。

まず志向性（何かに向けられているということ）がどの行動に  
も見られると考えている。動作は見る事ができるとはいえ、こ  
の志向性は思考や記憶のように、直接知覚できる運動を伴う心的  
過程では、必ずしも常に見出されるとはいえない。遊びについて  
いうと、遊ぶことは常に何かで（with something）遊ぶことを意味  
する。この場合、思考遊びであろうとおもちゃ遊びであろうと区  
別はなされない。志向性は結果を規定する行動はどのようなもの  
であれ、そこに向けられてあるという性質があることを意味する。  
そこにはいつも何かと関わり合っているという問題が存する。

次の特徴はひとが他の人びとと、したがって子どもと知り合え  
るのは状況（situation）の中においてのみであるのとの理解であ

る。ここで問題となっているのは状況に関する客観的基準の認識  
ではなく、ひとりの主体が状況を経験し、そこで生き抜く、その  
経験と生への洞察をうることなのである。現象学的心理学の課題  
は状況を分析すること、それに特に主体がその環境との関わり  
の中でどこに位置しているかを示すことである。

第三の特徴はひとがその環境と共有する関係の存在を認める点  
にある。関係ということばの代りに、ひとは環境との対話におい  
てあるともいう。従ってここでいう関係とはひとと環境という二  
つの極が絶えず相互に影響しあうダイナミックな過程である。

以上のことから、遊びは世界内で遊ぶことを意味し、その世界  
のゆえに状況が存在するのだし、また環境との実存的関わりもそ  
の世界に属するといえよう。そしてまた遊び行動は子どもが彼の  
環境と共有する関わりの結果であるといえよう。これが現象学の  
原則からする遊びの根本的な考え方である。これ以上の説明は他  
の機会にすることにして、ここでひとつ、フェルメール女史との  
関係で、強調しておかねばならぬことがある。それは現象学的な  
行動理解には鋭敏な感受性と人間的な暖かみとが不可欠である  
ということである。子どもの行動の意味を洞察するには、どんなに  
かすかな行動の変化をも感じるとる感受性と、どんなに短い行動の  
合間にも、そこに人間の息吹きを感じる人間的な暖かさが要求さ



れる。彼女はこの二つを豊かにもっている。彼女はいまそうした現象学的な眼で日本の文化を見始めている。墨絵や能、俳句、あるいは日本人の甘えなどに深い理解をもつ彼女は、今秋、五度目の来日を予定している。そのために日本語を勉強しているが、七十歳を過ぎてもお若い情熱に燃える彼女に私は感激をおぼえる次第である。

(金沢大学)

註1 E.A.A. Vermeer: *Spel on Speelpedagogische Problemen*,

Bijleveld 1955

註2 H. Schenkerl, A. Filmer, A. Rüssel, J. Chateau

ここでは小さな子どもとおとなの間の対話 (dialogue) としての教育学的関係を理解しようとおもう。おとなは文化的世界を表わしているが、子どもは自然な被造物として生れる。子どもは大きくなって文化的世界の中で自分の未来を確立しなければならぬが、親や教師は子どもがそこで自分の進む方向を学び、発見するのを助ける。しかし教育学的関係はおとなの世界に通じる将来の展望を一方的に

註3 M・メルロ＝ポンティ M. Merleau-Ponty については、

次の翻訳書を読みたい。

。行動の構造 みすず書房

。知覚の現象学 全二巻 みすず書房

。シーニュ 全二巻 みすず書房

。眼と精神 みすず書房

。世界の散文 みすず書房

なお参考文献として次の書をおすすめします。

西頭三雄児：遊びと幼児期 福村出版 一九七四

規定するものではない。子どもが自分の世界を築き、自分の経験に意味を与えるのである。しかも子どもはこのことを自分自身の展望にしたがって行なう。親が教育学的関係に入ろうとするなら、子どものいうことに耳を傾け、子どもが自分自身の展望にもとづいて世界を探索する、その彼なりの仕方を理解するようにしなければならない。

対話という教育学的関係の中で子どもを教育することは

必要であるのか。これは教育 (education) がもっと有効に利用できる時間を浪費することではないか。アントワーヌ・ド・サンテグジュペリの語る『星の王子』の物語に耳を傾けてみよう。

星の王子が、危機に直面したアントワーヌの生に入りこんできたのは、アントワーヌがエンジンの故障でやむなく着陸した砂漠で飛行機を修理してるときだった。このとき星の王子はいろいろと質問をもってアントワーヌのところに来てきた。そして彼に羊の絵を描いてほしいと頼んだ。しかし王子はおとなが知覚し、考えているような絵、つまり四つ足でふさふさした毛をした動物の絵を描いて欲しくなかった。羊が安全に隠れていられる小屋の絵が欲しかったのである。

おとなの世界と子どもの世界はなんと違っているのだろう。おとなの世界は論理的な推論による説明の世界だが、子どもの世界は暖かさや保護といった身体で感じる世界である。子どもはしきりにおとなの世界を発見しようとしているし、親や教師のいうことにじっと耳を傾ける。しかし同じように、おとなも子どもに耳を傾けなければならぬ。つまり子どもの経験が生み出す想像に耳を傾けなければ

ならない。子どもは、大きくなって明日の世界にとびこんだときに、根拠となる真理としての自分自身の原世界が必要なのである。

小さな子どもといえば、通常、就学前の子どものことを考えるが、この子どもは既に発達の過程を経てきている。この過程がどのように短くても、これは経験に満ちており、この経験は新しい展望に達することによって子どもが自分のものとしたもので、この新しい展望によって経験が意味あるものになるのである。例えば、子どもが意味を指示する道具としての言語を発見すると、世界は全く新しい展望をもつようになる。子どもは事物に名前をつけることによって他の人びとと通じあうことを学び、身近の接触を断って遠くと通じあうことを学ぶのである。また子どもが事物を目標への手段として用いることを学んだとき、事物は新し、展望を呈するようになる。直立歩行によって世界は手のこどくものとなるが、このことはまた子どもの自立に展望を与える。しかしこれは、遠い世界が孤独の感情を子どもにひき起すとき、失望を伴う。

子どもの発達はいくつかの意味豊かな経験レベルに区分して説明することができる。<sup>註1</sup> 発達が進むにつれて、子

どもはおとなが理解しているのと同じように世界を理解しようとして探究のレベルを次々と経ていく。

ここで再び教育学的対話という問題が生じる。これに答えるに就学前の子どもの発達を追ってより高いレベルへと進むつもりは今はない。むしろ反対に逆の方向をみたい。なぜなら、レベルの区分は以前のレベルが消失することを意味しないし、それらのレベルはより深い、ときには前意識といった仕方で、世界と子どもとの関係の中にとどまっている。子どもが困難を克服できないのはどのような時か、このことを私たちは知っている。それは、例えば、おとなが子どもに自立を強く期待するときや、世界があまりにも子どもの手のとどかないものになったときである。つまり発達の前進が失敗し、子どもが後向きに、あるいは下向きに以前のレベルに戻るときである。星の王子の物語が教えるところのことは根源的な安全性の意味についてであり、子どもは経験が統合されたレベルに達してもなおこれを保持しているのである。

精神分析の理論によれば、後向きに以前の経験に戻ることを「退行」といえよう。この後退を教育学的対話の一つのサインとして注意したい。子どもは前進のための新たな展望として安全性のレベルに意味を与える。子どもとの対話で親は子どものだすサインを認めなければならないし、また、より以前のレベルの子どもの経験についても知る必要がある。退行をば失敗と認めるだけでなく、また、より根本的なレベルの子どもの行動がもつ意味を理解しなければならぬ。親は安全と身近という最初の子どもの世界を知らなければならぬ。この世界ではコミュニケーションは感じ合いと触れ合い (feeling and touching) によって表現され、対話は直接の身体の触れ合いの中に見出される。子どもが成長してこの第一の時期をすぎても、対話はただことばだけによるものであってはならない。教育学的関係にあつて重要なことは身体言語で表わされる子どもの表現に気づくことである。これは意味という点ではことば言語よりも根源的なもので、<sup>注2</sup>親もしばしば身体言語で答えなければならぬこともある。私たちは教育学的関係を異った

レベルでの対話として理解しようとするのである。

教育学的関係は教育的展望に基き、この展望は二つの条件に分けて考えることができる。つまり生物学的あるいは自然な発達と文化の教育である。しかしこの区分は人為的なものと解さねばならない。このことは初期の子どもとの関わりの重要性が注目され、過去をふりかえることが将来を考えることと同様に重要なこととなったときに一層明白になるだろう。

条件のひとつは子どもが生物学的被造物として生まれるということであるが、必要な知識や技術をまだ十分身につけていないので、子どもは自分の環境を生物学的方法で自分のものとすることができない。すなわち本能という備えつけの知識や技術によって環境をわがものとするのである。しかし子どもがいかに文化的世界に生まれ、文化的な仕方<sup>1)</sup>で自然を統合した人間によって保護されようとも、子どもの成長は自然のパターンに従う。子どもは直立歩行が可能になる前にまずものを掴む。このことによって親は子どもにも干渉し、子どもを助けて事物の意味を発見させる機

会をもつのである。親が事物を子どもの身近な世界に導入し、子どもはそこで自分の身体でもって事物をわがものとするのできるのである。と同時に、親は箸や茶碗の持ち方などの手本を示すことができるのである。

子どもは直立姿勢の発達によって手が自由になり、事物を道具として使用するようになる。それゆえ、子どもがおとなの世界の意味を学ぶことのできる自然な成長期に親は注目しなければならぬ。この学習は子どもの身体の成熟に伴う学習である。

自然な成長はその成熟の方向としてこれを二つに分けることができる。すなわち一つは直立姿勢の発達で、これは坐ることと立つことによる。他は身体運動が近くから遠くへと及ぶことのできるような発達であり、これは手腕足脚から指にいたるまで、いわゆる手足の発達によるものである。手足の運動のコントロールはさらに柔軟で適切な仕方<sup>2)</sup>で環境をコントロールできる力を子どもに与える。長い成熟の期間を経て無力な新生児は成長し幼児となり、文化的世界への開化を示し始める<sup>註3)</sup>。この時期の子どもとの対話はひじょうに重要である。

発達は単に教育学的関係によっておとなの世界へと方向

づけられるだけではなく、立って歩くことのできる幼児もまた意味を付与する自らの自由の新しい展望としての世界と自分の身体の非依存性を発見する。この非依存性はさらに身体コミュニケーションと異った他の方向へ退行する自由をも許す。そこで子どもは身近から引きさがって他人と対決することができるし、「ノー」ということの意味に気づくようにもなる。子どもは「ノー」という言語表現を発見する以前にこの意味に気づいているものである。よちよち歩きの子どもは身体の自立が進むと同時に言語の発見が行なわれるような状態に達する。これは困難と同時に自由をも与えてくれる。親は子どもの自立の現われを過大に評価すべきではない。子どもの状態はまだ文字通り『おぼつかない足で立っている』ものだからである。これは親がそこから子どもと世界との関係を読みとることのできる表現である。

ここで教育的関係と、これのあるべきものとしての対話にかえろう。対話はまた身体言語によっても表現される。現象学の観点からすると、身体の発達と心の発達とは区別されえない。これらは全体としてみられねばならない。つまり一体としてみなければならぬのである。メル

ロ＝ポンティは身体我について述べているが、これはすでに前意識のレベルでの意味豊かな存在である。<sup>註4</sup> このことは子どもとの対話が既述の元来一であるところの条件に基いているのだという確言であるといえよう。

対話の一方の側では、子どもは身体発達に基いて発達する生物学的被造物としてみることができ、身体発達は子どもに自然な世界を越えさせ、身体我としての子ども自身の世界に意味を付与する柔軟性を与える。

対話の他方の側からいえば、そのようなことは教育によって、つまり自然環境を文化的世界へと拡張すること、すなわち子どもを文化へ導入することによって援助する親がいなければ不可能である。そしてこの文化的世界は子どもが安心感をもちうる家庭（やうど）とならねばならない。

これら二つの条件を全体として把握するとき、親は成熟する身体我をば発達しつつある心的主体として表現している子どもを理解することになる。なぜなら、子どもの身体の心的機能（あるいは心的存在の身体化）は人間主体としての子どもの意味豊かな表現だからである。<sup>註5</sup>

子どもとの対話に際してみられる身体言語の重要性に注意しなければならぬ。このような対話は話しことば以前

のレベルにあるが、話しことばにおける意味の分化に展望を与える。それは最も重要な人間文化の習得のひとつである。

註 3 「身体化の問題―身体現象学粗稿」  
A. Portmann: Biologische Fragmente zu einer Lehre von Menschen. Basel 1944

「人間は「う」まむ動物か」 岩波書店

註 4 M. Merleau-Ponty: Phénoménologie de perception, Paris 1945

「知覚現象学」

M. Merleau-Ponty: Signes. Paris 1960

註 5 「シーニュ」 みすず書房 昭四四

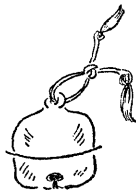
私たちはすでに、ことはの意味のレベルに達してはじめて子どもは自分自身の主体的意味を表現する自由をうるということを知った。ひとつの脈絡から他の脈絡へと類比経験を移行させるのは単語のもつ象徴機能を用いることによつてである。子どもが遊んでいるとき、椅子は「飛行機」や「自動車」として指示されうる。自然と文化の発達条件間に横たわる子どもの対話にみられる自由に注目しなければならぬ。

真行寺 功訳

註 1 M. J. Langeveld: Ontwikkelingspsychologie, Groningen 1971

「発達心理学」

註 2 R. M. Zaner: The Problem of Embodiment. Some contributions to a phenomenology of the body. The Hague 1964



# 私の幼児教育論

——保育を考える——

## はじめに

私は本書を愛読しているひとりである。本書を手にするようになってから、まだ八年と少々であるが、この間、数多くのすぐれた論文、実践記録に接することに、ある時は勇気づけられ、ある時は心の支えとなってくれた書である。それが、今回の「私の幼児教育論」執筆ということになり、本当に驚いている。

幼児教育に携わった経験も浅く、ましてや幼児教育論を論ずる力もないが、一緒に苦勞を共にしてくれた幼稚園の先生方のおかげで、自分の考えをまとめる良い機会でもあることを合わせ、ご批評を受ける覚悟をきめたのである。

私が、直接幼児教育に携わったのは、昭和四十六年四月から、五十二年三月までの六年間である。もともと、義務教育の教員で

河合 英二

ある私が、突然、公立幼稚園勤務を任命され、ある程度は幼稚園の保育内容をつかんでいたつもりであったが、幼児と直接ふれ合って、自分の考えていたことのあまさに気がついたわけであった。

この短い六年間で学び得たものが、私の幼児教育に対する考え、構えのすべてである。したがって、何十年と実践を積み重ねておられる保育者からみれば、まことに視野の狭いものに感じられるかもしれない。しかし誰もその環境の中にとっぷりとつかっていればいるほど、時として距離をおいて外から眺める必要があるのではなからうか。この場合、いろいろな問題点が見出せると同じように、未経験の私から見て感動する面も多々あるが得心のいかない不思議な面もないわけではない。

幼稚園の核は、何といっても保育である。今、目の前にいる幼

児に何をなすべきかを具体的につかみ、生きた保育が毎日展開されなければならない。以下、保育についての私見を述べてみたい。

○

幼児の生活は遊びであり、遊びが生活のすべてである。遊びの中で発達するのが幼児である。これらのことは、幼児教育に携わる人から良く聞くことばである。私も全く同感である。

しかし一方では、私のクラスの子どもは遊ばなくて困る。どのようにしたらもっと活発に活動するようになるのか、という声も聞かれる。幼児は、本来、遊ぶものである。ただそれが少人数か多人数かは別として（時には母親とだけしか遊んでいなかったかもしれないが）家庭でも遊んでいたはずである。

それが遊ばなくて困るという声が出るのは極端な云いかたをすれば、幼稚園において、遊ばせない何らかの原因をつくっているのではないだろうか。

例えば、かざぐるまを作つて遊ぶという保育内容を設定し、材料あつめからはじまつて、幼児の創意と工夫を生み出すための良いアドバイスを教師は行なう。幼児は喜々として、かざぐるま製作にはげんでいる。

この姿からは製作活動としてのねらいは、ある程度達成していると思う。しかし、その後の指導で園庭等へ出て、作つたかざぐるまを使って遊んでいる光景を観察していると、教師側が「高い所と低い所とは、どちらが良くまわるか」というような保育のかまえになっている。

すべり台の上に立たせたり、園庭や中庭でためしたりさせるのであるとか、確かによくまわる、あまりまわらない、ということ自分の作つたものがどうしてまわらないのかを考えたり、ともだちの作品をよく見たりすることを含め保育を進めていくことに、異存はないが、高い所、低い所とのちがいを見出そうとすることが、幼児の科学性の芽ばえなど考えることは、あまりにも、幼児の遊びに対する認識が不足しているのではないだろうか。

もし、すべり台の上でかざぐるまがまわらなく、園庭の時にまわつたらどう指導するつもりであろうか。幼児にとって風の力などに関連づけるよりも、作つたもので遊ぶ楽しさを味わわせることが、何よりも大切なのである。子どもが遊ばない原因も、このようなところにひそんでいるかもしれない。

○



次の実践記録を紹介したい。

二月のある日、ままごとコーナーでの会話である。

「はい、次の方」

「どうしましたか」

「かぜらしいんですけど」

「では、ベッドに寝てください」

このように、看護婦、患者、医者と、はっきり役に分かれ病院ごっこが始まった。というのは、現実にけがをした幼児の包帯を、私（保育者）が、ままごとコーナーでまきなおしをしたのがきっかけであった。この遊びを「もっと発展させたい」と思い、看護婦、医者用の白衣を給食用のカップパー衣で代用しようとしてみた。するとどうだろう、

「わー、本当の看護婦さんみたい」

と、うれしそう。すると隣にいたY子が、

「包帯にするものがほしいなあ」

と、要求してきた。この時、私の脳裏をかすめたのは、本物の包帯であった。「でも子どもの病院ごっこに本物の包帯は少しもつたないかな」とも思ったし、「本物の包帯でなくても、それに代わる物さえあれば、いいのではないか」とも思った。

しかし、せっかく給食用のカップパー衣を着て、楽しんでいるのだから「包帯も本物を出してやろう」と決め保健室から持つてくると、

「わー、本物の包帯だよ」

とびっくりした顔。するとM子が急に

「じゃあ、お客さんを連れてこなくちゃあ」

「名前を書く紙をつくらなくちゃあ」

と、大騒ぎ。カップパー衣、包帯を出す前では予想もできないほどの活発さであった。

このように、何もないところでは、いくら幼児でも遊びが深まらない。特にごっこ遊びはそうである。しかし、一たん一つの物を与えると、幼児は独得のすばらしい想像により、四方八方へ遊びを広げていってくれるのだ。換言すれば、水槽にインクを落した時のようだともいえる。

これは、おとなでは、とてもまねのできない幼児の魔力である。この時期にしかみられない魔力を、精いっぱい発揮させてやらなければならない。しかし私たちは、それをさせてやっているだろうか。現に私も「ただの病院ごっこだから」と、あまり考えていたが、迷ったあげく、本物の包帯を出したことは、この場では良かったと思う。でも、ごっこ遊びには本物を与えられないも

のがたくさんある。例えば、ままごとで使う包丁である。本物ではないが、幼児は満足して使っている場合が多い。このように本物でなくても活動が活発に行われることもあるが、道具を与える時は、おとなの妥協で与えてはならないと思う。幼児のすばらしい魔力を吸い取り紙で吸い取ってしまうことと同じだからである。

幼児だからこそ妥協は許されない、決して本物でなくても良い。幼児の想像力を呼び起すようなものを与えたい。そして、この時期に見られるすばらしい魔力を十分發揮できるように仕向けたい。私たちはインクを吸う吸い取り紙になるのではなく、よりよいインクを幼児に提供することである。

これは、真山泰子教諭（現・豊田市立林丘幼稚園勤務）が、四歳児担当時に『子どもは心から変身する』と題した実践記録の一部である。保育中における教師の配慮・判断が如何に大切かが良くわかる。そして、この価値判断が、幼児を変革させていく重要なポイントであり、このポイントを実にうまく真山教諭はとらえている。

幼・小の関連という言葉もよく耳にする。今回の指導要領の改訂により、小学校低学年における、合科的な指導がうちだされてきた。このことは、従来各方面より、幼稚園と小学校低学年との教育に、大きなへだたりがあるとの指摘を、ある程度解消していく方向とも考えられる。

神戸大学教育学部附属明石小学校では、この幼稚園教育との段差を解消すための、すばらしい実践がなされている。（子ども遊びや生活に根ざした総合学習）

このように、幼・小の関連を考えると、小学校教育はこうだから幼稚園はどうすればよいかというよりも、幼稚園は幼児を保育する独立した教育機関であり、小学校教育の先取りのな発想は通用しないであろう。

一斉保育だ、幼児自ら選んで行う経験や活動だとかの保育形態を論ずる時代でもない。

要は、ひとりひとりを大切に、どの幼児も、その子なりに満足する幼稚園生活を送っているかどうか、重要なのである。幼児にとって、何が今必要で、何が大切かということを十分ふまえた上での保育が展開されなければならない。

（愛知・豊田市教育委員会）

## 私の保育

——幼稚園生活で大切にしていること——

松原美智子

本来教育は自主的、創造的に行なわれることが大切であります。

教師も子供も自分の力で考え、体当りで遊び共に学び、共に育っていくような生活ができるよう努力しなければなりません。

子供たちが自主的に遊ぶ中には、ちゃんとしたルールがあり、それぞれの子供が責任をもって遊んでいます。生きていくためのルールをこの時代からもう作り出していると言えます。

保育者はしばしば指導者でありすぎると指導することがあり規制することにすり変わっても気づかないことがあります。

子供のよさが観えず、すぐ回答を出してしまい、子供のもっているイメージを待つことができなく口出しすることもあります。

子供と一緒に生活する一日をなんとなく生活するのでなく、それぞれの教師の持味を出し、暖かいものが心の奥に流れ合うよう一人一人の子供の心に響かせ、いつか、どこかでそれが役に立つものと信じて生活していきたいと思えます。

「くり返されるリズムを考える」

前にも述べましたように、私は子供たちの自主的な発想と教師のもっている経験とを互いに出し合い生活していくことを何よりも大切にしています。子供たちが最も安定した一日

を送るために生活のリズムが毎日毎日違っていたりしたら落ち着かないでしょう。くり返される毎日の生活の営みの中で子供は育つと言えます。表面的にはいろいろな子供がいてごつごつしているかもしれませんが。しかしその中には、思いやる気持、励まし助け合いの気持が生まれ子供らしく育て、活気に満ち雑草のごとくのびのびと遊ぶ中に集団のルールが守られ、基本的な生活習慣も身につくようにして、きめ細やかな生活を心掛けています。

### 「子供とゆっくり遊ぼう」

遊びの興味を続けさせ、熱中させるかは、教師の心のゆとりと、本気で遊んでいるかどうかで決まってくるものです。

いろいろな遊びに入ってやりたいと思えばちこちらと歩くだけでは意味がありません。これではすべてが不安定となり充実しないことになります。

子供とゆっくり相手をする覚悟をして入ると子供も本当に遊んだという満足感を味わうものです。また遊びは正しく遊べるまで十分にかかわってから次の遊びへ移動しないと、教師がその場を去ると上手に遊べず消滅してしまう場合が多いようです。子供たちの遊んでいるところを見て、どの遊びを

中心にし、深めていくかの判断でその一日が充実した日になるか決まってしまうようです。

リレー遊びの一例を上げて考えて見ることにします。九月の中頃からリレー遊びが盛んに行なわれるようになってきました。バトンを持って喜び勇んで出て行きます。初め一・二回はトラックを回って上手にバトンも渡し走っています。ところが三・四回くり返すうちに、トラックをしつかり守らず、強い子が何回も走って順番も守らず、真剣さがなくなってしまう。時々教師が来て一緒に遊んでもらえる時は、本気になりますが、遊びからはずれるとまた同じ結果になってしまうようです。考えて見ますと、何んでも遊びに興味をもった時の初めが大切で、たとえ少人数であっても、赤・白チームの人数の確認、ゼッケンをつけさせ走る順番も決めて、正しい遊び方を方向づけておかないと、いつまでたっても育ちません。遊び方一つにも教師のちょっとしたアイデアで正しく、楽しく遊べるということになります。

### 「毎日の記録の積み重ねを」

私たちは記録を大事にしています。記録を通して言えることは、書くことによって教師のたしかな目が養われるもので

す。とかく教師は子供の表面的な行動、言動に押し流されやすく、その子の内面にゆっくりふれようとしないところがありません。

一人一人をじっと見つめ心のつぶやきを感じとれるような姿勢にならなければならないと思います。

こうして毎日の記録の積み重ねを大切にしてみますと、今まで何んでもなかった行動に意味があり、意義があることを痛感すると同時に、何げなく言葉をかけたり、動いたりしていたことを反省します。記録を続けることによって子供と教師が見えない糸でしっかり結ばれていることを忘れてならないものと思います。教師の喜びもこういうところで味わうものです。

### 「戸外遊びを充実しよう」

私の園では戸外遊びを大切にしています。子供たちは戸外で体を動かして遊ぶことが大好きで、ボール遊び、鬼遊び等十月頃から盛んになってきます。思いきり体を動かし、汗を流して遊んだ後は子供たちもさわやかな落ち着いた気持ちになるようです。特に五歳児は戸外遊びで体ごとぶつかり、仲間への思いやりやいろいろなルールについての相談、協力等の

広がり、深まりも出て来ます。

ボール遊びも初めは簡単な受けっこ、けりっこ、投げっこ、つきっこから次第に「先生本当のサッカーやろう」と子供の方から要求するようになり、ゲームらしいものが生まれてくるものです。ごく簡単なルールから初め園庭全部がコートで、ゴールの中に入ったら一点というくらいにします。抵抗なくゴールにボールが入ってしまうので「先生ここにだれか立ってボール止める人がいるよ」とすかさず子供から提案、このように次から次へと遊びが複雑になり、面白さが増して来ます。

子供たちは汗を流し必死でボールを追って走ります。こうなれば教師も力を加減せず、思いきってゲームに参加します。五歳児にはこんなところが必要なんです。ドッジボールも二面コートを使い行なうのですが、遊び込んできますと、教師も思いきりに弱いボールを投げますと、本気でないことを悟られ、子供たちに意欲を燃やすことができな場合があります。真剣にボールに取り組み、戸外での遊びが充実しますと、他の遊びへの取り組みも違って来ます。心も体も健康で明るい豊かな生活は、大いに体を動かし育つことも忘れてはならないものと思います。それが大人になった時、大き

な精神力となつてくれるものと望みを心にいだいています。

### 「教師が手本を示して見守る」

最近うれしく感じていることの一つに便所の下駄、雨の日の傘の始末が大変きれいにそろふようになったことです。いろいろな身につけさせ方があると思いますが、私の園ではみんなの前で仕方を強制しないようにしています。注意すればその場では守るかもしれませんが、それが一人になった時どうでしょう。言わなければやれない子になってしまいます。また便所などの園でも線が書かれ、わくが決めてあるようです。私の園では指示してありません。次の子がはきやすいようにいつも並べられるようにだんだんなってきました。一学期はとにかく上手に並べられませんでしたし傘は傘立にいつぱいになって入っていました。まず教師から直すことを基本にしてみました。そうしてきてもなかなか気がつけず、途中でこの考え方は私たちの子にはだめではないかと考えてしまったこともありました。二学期に入り、子供たちとのつながりも深まるにつれ自然に身につけていることに気づき、本当にこれでよかったですと感じています。

言つて聞かせるよりはして見せることの方が子供の活動を

啓発する。しかしして見せることは子供の活動の誘導のためであつて、見せた通りの型に子供をはめこむためではありません。待つ指導の大切さを知りました。

### 「雨の日は雨の日の生活が」

朝から雨がしとしと降っているので子供たちは、部屋の中で空箱で製作しています。時々空の方を見上げては空模様をうかがっています。しばらくすると小雨になり、空も少し明るくなったようです。子供たちは待つてましたとはかりに園庭へとび出していきました。いつもなら園庭もところ狭しと遊ぶのですが、こんな雨あがりには我がものとはかり何も束縛されることなく遊びます。長靴をはいて水たまりに入つて喜ぶ子、ぬれることも気にせずブランコに乗ったり、鉄棒で遊んだりします。そんな時の語らひは、のびのびとしているように部屋の窓から見ながら感じたほどです。と今までやんでいた雨がまた降り始めました。子供たちはいっこうに気にせず砂場で砂だらけになって遊んでいます。私は傘をさして迎えに行くことにしました。みんなの所まで雨の歌を歌つて「雨が雨が降っている……」と「傘を持ってまいりました。」と傘をさしのべました。「ありがとう」と言つて傘の下

で砂遊びを続けました。まさか傘の下で砂遊びができると思わなかったでしょう。「フフフ、フフフ」と微笑みながらダンゴ作りをしています。傘からしずくが落ちるとダンゴがぐずれ壊れてしまいます。それを発見し何度もくり返してやっています。またしずくを見て「雨の小人さんだ」と言って手のひらに受けしずく集めも始まりました。

雨の日は雨の日の生活があるとはこのことだと思えました。この時部屋の方から大声で「ぬれちゃうわよ、入っていらっしやい」と言ってしまったらどうでしょう。雨の日のこの思い出は心に残るはずありません。

### 「名前を呼ぶのも心をこめて」

私たちは何げなく子供の名前を呼んでいるように思いますが、声としては普通に出しているように思われても、心の片隅で常に乱暴したり、話が聞けなかったりして教師の心にとめている子に対して、アクセントが違うように思います。いつも傍観的な子には今日は何んとか入ってほしいと願って名前を呼びます。でもまたきつことわられると思えば呼び方も変えます。常に信頼関係ができている子にはそんなに気にとめなくても大丈夫でしょう。本当にあの子は困る、私が一

生懸命でもいっこうにやろうとしないと心のどこかで通じ合おうとしないしていると、どんなに優しい言葉をかけたとしてもだめで、教師の気持を読み取ってしまいます。ですから何をしてもうまくかみ合わないということになります。きつとこの子を何んとか遊び込まそうという教師の自信とその子を理解しようとする努力をせず、ああいう子だから困るではありません。言葉にもリズムがあるように、名前を呼ぶのにもリズムがあります。さわやかな呼び方でありたいと常に私は心しています。

### 「気持のよい関係を」

朝登園するなり洋子と達也が昨日のリレー競争の結果の話し合いをしている。「ねえ達ちゃん、私たちいやだね。」「なんで。」「だってさあ、<sup>ヤチ</sup>康文君がいるとリレー負けちゃうもんね。」「おお、ぼくはすごい早いけどなあ。」「達ちゃんは早いけど、康文君なんかいない方がいいね。」と盛んに昨日のリレーで負けたことを強調している。と洋子は私のいることに気づいた。でも悪いこと言ってしまったという顔もしないでここに微笑んでいる。康文は小柄で運動をあまり興まず、静的な遊びをいつもしている。私は「洋子ちゃん負けてくや

しかったの」の聞いてみた。「うん」「また今度康文君の分までみんなでがんばれば、洋ちゃんだって、達ちゃんだっているからきっと大丈夫よ」「康文君も自分の力を全部出して頑張ったんだからみんなで応援してあげて」「うん、でも」と私の言葉にまだ納得がいかないようである。達也は「うんそうだよ、今度こそぼくがみんなぬかしちゃう」と面白い口調で言うので洋子も私もふき出してしまった。康文はまだ登園して来ない時の出来事で私もすくわれた。

五歳児になると、お互い子供同士を見る目も鋭く批評し合う場面があります。子供同士の批評は、教師よりも厳しく感じるようです。

この頃になりますと子供の言葉にも意味があり、けんかも社会性の芽をたくさん含んでいます。

学級づくりをしていく上でこの辺をしっかりとらえ、正しい方向に誘導していかないと弱い者いじめになってしまい、ふん囲気を壊してしまうものです。またこの頃から学級意識も高まりますので一人の問題としないで、学級全体で考えていくようにすることが大切です。

その後洋子と達也にチャンスが回ってきました。一位になったのです。その喜びよりは言葉で言い現わせないほどの歓

声でした。

洋子や達也にはそれからと言うもの康文の事が聞かれませんでした。

### 「きめ細やかさ」

一人一人を大切にする保育、みずから選んで行なう経験や活動が重要視されても十何年になるでしょうか。

それ以来お互いに子供を見ようとする目はたしかになって来たと思います。反面子供尊重の言葉を深く考えないで、放任と自由とのはき違いをしているところもあるようです。

きめ細かい心づかいをして、心では教師自身自分を厳しく見つめていかなくはなりません。子供をはれる者のようにふれるのではいけません。真实性のある、本当の心をぶつけ合う生活が子供の心に響くものと思います。

型にはまった中には

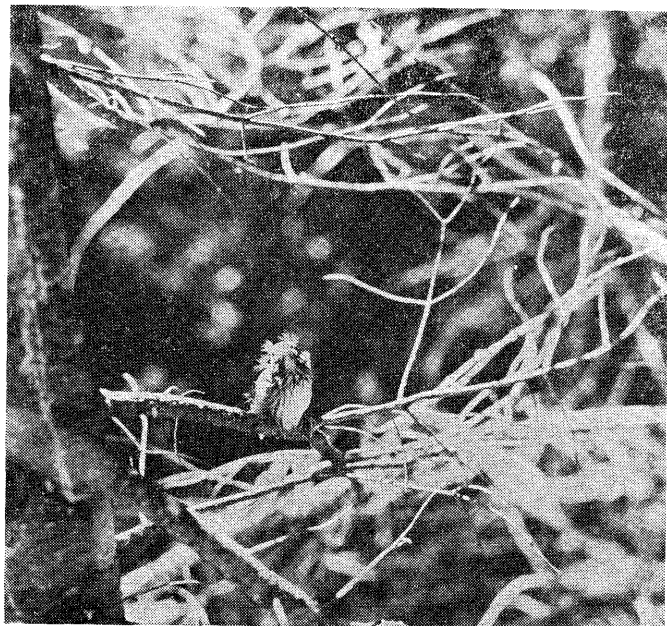
型にはまった子供しか育たない。

型にはまった生活は

型にはまった言葉しか生まれない。

(愛知・豊田市立美山幼稚園)

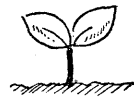




北国の春は遅い。  
芽ぶきをみない林の中、  
風光り、  
アオジのひなの生毛は  
きらめきゆれた。  
ひなの巣立は、ここ帯広  
の春を呼ぶ。

写真撮影・叶内拓哉

## 「送る」という気持



村石京子

今書いている原稿が活字になって載る頃には、クラスの子どもたちを送るその日が目の前に来ていることであろう。三月という月は、子どもたちにとっては、人生の中で初めての出立を迎える月である。「卒業」という嬉しくて晴れがましい体験、そしてその先には今までよりずっと一人前として社会から扱われる「小学生」という新しい門出が待っている。子どもたち自身どんなに誇らしく、その喜びも大きいことであろうか。

そして教師の側も子どもたちと同様に、いや、あ

の幼なかつた入園当初の面影や、様々の出来事が忘れがたいだけに、今こうして見られる彼等の成長した姿がたとえようもなく嬉しい。しかし、嬉しいだけに、一方では手塩にかけた掌中の珠を手放すことに言いしれぬ淋しさと愛惜の気持で一杯になってしまう。

T 「四月になったら小学生ね」

「あのね、もう制服が出来たのよ」

T 「嬉しいでしょ」

「嬉しいよ」

T 「一人で学校へ通えるかしら？」

「大丈夫だよ、もう今だってちゃんと一人で出来るもの」

「小学生になるのは嬉しいけど、ちょっとびりいやなのは先生とお別れだからいやなの」

「先生も小学校へ来てくれればいいのに」

「ねえ」

何気ない子どもたちとの会話の中で、私は胸をズンとつかれ、別れの寂しさがこみあげて来てしまうこの頃である。

何回卒業生を出してもこの「送る」気持のつらさは変わらない。それなら教師にとっては送ることは、つらい寂しいことなのかというと決してそうではない。彼等の二年間、三年間の歩みを走馬燈のように思い出し、頼もしく立派になった様子に、教師としての喜びを存分に味わうのが、この「送る」日であろう。全く複雑な胸の内である。人生には、人との出会い、ふれあい、そして別れがくり返されてい

る。そして人との別れの中で、喜びと寂しさが折り重なり、やはり喜びの比重の大きいものは、卒業がその最たるものといえよう。

子どもたちを手元から送り出す時期が近くなり、一人一人のアルバムはやりはじめると、その写真の一枚一枚に思い出もつけないだけに、何かと来し方行く末を思う折も多くなってくる。一方ではその成長をもっと見守りたい気持がおきてくる。また一方では、今までの子どもたちに対しての自分の接し方、かわりあいがあればよかったのだろうかかと迷いが出て来る。その時その時では、自分として決してなおざりにしない一生懸命の気持で接したつもりであっても、もっと別の角度から見れば違った心づかいが出来たかもしれない、もっと別の言葉かけをすれば違った反応や異なった状況に展開したかもしれないと、様々の事柄を思い起こすにつれ、あれでよかったのだろうかかと胸が痛くなってくる。あの時はそう思ったけれど、どこかに思いやりが足りなかったのではないだろうか、子どもの側に立って考えてあげただろうかと至らなさはばかりが強

まっつ子どもたちに濟まなく思われてくる。人間の基礎をつくっていく大切な幼児期であり、何でも信じ受け入れていく時期であり、そして人生ではじめて接する教師の影響力を思うとき、その責任の大きさを感し、自分は一体子どもたちに何をしてあげただろうかとその非力さに自分を恥じ、子どもたちにわびたい気持ちになつてくる。

今日の一日をふり返つてみても、あの時もっと私の方からあの子の中へしっかり入つていつて、あの子の心をつかまえた方が良かったのではないだろうか、いややはり子どもたちの世界を大事にしておいて、子ども同士の中から学びとつていくようにした方がよかつたのだなどと迷い、なやみはつきることがない。そして明日はまた新しい出来事があり、その中で迷い、なやみがおきるに違いない。それから更に新しい社会へ巣立つていつたとき、どうやつてこの子たちは様々の出来事に対処し、適応していくであろうか。一人一人の性格がよくわかつているだけに心配もつきない。「送る」という言葉を広辞苑

でひいてみたら、「人の出立に、別れがたくつていつて行くのが原義」とあつた。私の子どもたちを送る心はまさにそうであろう。出来ることならずつとつき添つて見守つていきたい、そんな気持ちを無理に区切るのが卒業の時の「送る」という行為なのだろうか。

今の私は、もうじき訪れる「送る」喜びの日を前にして、思い、惑い、惜しみ、愛しながら、クラスの子どもたちの中にある。残された日々の保育の中で、一人一人の子どもたちが暖かく充たされた心を持つてるようにと願ひながら。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



# 放 つ



水藤 昭子

“放つ”と聞いたら涙が流れた。“放つ”

という言葉から来るイメージは、“放つ”

側の愛の決断と、放たれる側のいたいけな、ういういしい姿、勇気とよるこびを

感じるからであらうか。

この世に生を受けて以来、全心全霊を  
もって、慈くしみ育てて来た幼な子を、

始めて自分の手元から離して、幼稚園な  
り保育園なりに入れる時、時が来たので  
そうしなければならぬ愛ゆえの決断が

あって“放つ”勇気が与えられる。

子供たちよ

はるかな世界に飛びたつてゆく子供

達よ

母は、だから今日一日を

最善に生きてゆきたい

あの丘に咲き匂う菫

あの堀のほとりに花開く桜

あの空に浮かぶ雲のように

あの枝にさえずる小鳥

主人のあとを追って一心に走ってゆ

く

あの犬のように

母はきょう一日を

真実な者でありたい

これは、子育てに忙しい頃の日記の一

頁であるが、“放つ”日を思いみつ

母は一日一日を子供達と共に生活してゆくのである。

“放つ”とは、この両者が美事に別れ、自立へと出で立つことであるから、ひき離す為のもう一つの力は必要としない。

しかも、その度に経験する感動は、人間が愛に於て浄化され、美しくされてゆく尊い機会となるのだ。子を放つばかりではなく、親である自らもまたそのように

放たれて来た歴史がある。あの町、あの丘、あの電車道、神経を緊張させた通園通学の道、子供捕りを恐れた昭和初期の子供も、交通災害に脅やかされている現代の子供も、その緊張は同じである。放たれた世界で出会う種々な出来事は、最初短時間ずつであって、母の愛にかけもどって浄化されるがそれが次第に複雑になり、時間も長くなり、思考も知恵も深くなって、自分のうちで大かたの浄化は出

来るようになる。やがて彼等は幼い日々からの道程で全く自立し、放たれて出でゆく日を迎える。その時彼等は、自覚するしなやかかわらず、何者かに対して自らもまた“放つ”使命に立たされているのである。だから“放つ”業は人の業ではなく、もつと永遠の光の中に存在する業なのであろう。

神は光のない所に光を放ち、植物を生き繁らせ、空には鳥を、水には魚を、野に獣を放たれた。そこをエデンと名付け、人を創造して住ませ、人にこれらすべての者を収めさせられた。しかし、この信頼関係を損う事態が引き起こされ、人は神に対して罪を犯した。そして、エデンから追放された。しかしやがて罪からの解放者があらわれる。彼は神に対して世界人類の贖いとして死に、義に甦って、永遠の生命に人類を解

放する力を持っている。それが神と人との間に設けられた真実の道、救いの道である。

人の教育に心を用いる時、この事がはつきりしていないと、道に迷うことになる。迷うことも悪くはないが、そのまま迷いっぱなしでは、人の教育は真理からははずれてしまう。迷う時にも、どこから来てどこに行くのか、という指針がはつきりしていなければ、救われる時を失ってしまう。

“地球は青かった”と、最初に人工衛星に乗ったガガーリン宇宙飛行士は、感嘆の声を発した、と聞いている。神の創造の御業は、果しなく広く美しく、輝やきわたっているに違いない。その御業の中に、可能とされている自らの存在を思い、最善に真実に生かされてゆく道を見つめている。(長野・聖ミカエル保育園)

## 陶人形に託す

まだあたたかさの残っている窯の蓋を、そうっと開ける時、待ちかねたように所せましと並んでいる人形達が、私に話しかけて来ます。喜色満面で口笛の聞えて来そうな子供達や、なぜかふくれっ面の子供達等、私は改めて目をみはるのです。一塊の土くれから人形ひとがたを作り出し、慎重にいのちを吹きこんで行くのです。下の子もようやく高校生になった現在、母親だから子供の表情が豊かなのではないかとよく云われることがあります。誰から見ても、可愛さ、愛くるしさを感じさせる人形



### 可部美智子

は、芸術(Art)のセクションに於いては、全く低次元のもので、怒り、悲しみ、苦しみ、悩み、うらみを表現し、その迫力を訴えることの方が、より芸術的だとされがちではないでしょうか。人間本来の美を追求し生きることの喜悦、育むことの幸福として愛の心を、人形の姿をかりて訴え、語りかけるのは、私の自己表現の手段の一つといえましょう。

私たちは古い文献から「やきもの」の作られた背景を知ることが出来ます。古代中国に於ては、政治にかかせ

ない祭祀の道具や器は、青銅や土器でありました。時代が下ると共に青銅や鉄の器が影をひそめ、土器はうわぐすりをかけて、高温で焼く陶器へと移行して行くのです。最近中国で発掘されつつある王侯貴族の墳墓から出る陶俑（陶器の人形）は、副葬品として有名です。

昨年中国を訪問し、各地の美術館、博物院などを見学し、俑を見て来ましたが、何千年もの歳月を経たとは思えない感覚の新鮮さ、生き生きとした表情、姿態は現代人をも魅了してしまうものがあります。私も二三年前から俑にひかれ、暗い地下から明るい現代社会に踊り出させることが出来たらと美術館に出品したり、画廊へ出したりして発表しました。陶俑即ち陶人形も陶芸の一分野であり、私の作っている壺や花生、茶器などと同じように、普段の研究や修練を要します。

手法は彫ったり、けづったり、土をつけたりと彫塑的なものと、手びねりで仕上げて行くものと、二種類あるのです。出来上るまでの「工程」の道のりは遠いのです。土の塊を何百回と練り、成形し、乾燥し、素焼し、施釉（くすりかけ）し、窯詰めをし、徐々に温度を上げて、千

二百度余りの高温で、二十四時間かけて焼成します。暑い日にも、寒い日にも、精根こめて作る苦しみ、よろこび全てが凝集された、はりつめた気持で、窯出しの日はのぞみます。手のひらに感じる「土」のあたたかさ、「土」の親しさを少しでも、多くの方達に分かちあえる事が出来たらと考えております。

「土」は生きものなのです。「土」は広義では、地球の全ての生きものの生命の根源であり、又やがては帰るべき所でもあります。そんなエネルギーを秘めながら、私の手の中の「土」は、私の心にコンタクトをとるのです。炎の中でじっと耐え、新しい生命の灯をとります。

「土」という素材を使って、陶彫という手段によって、私はいろいろな子供達を作ります。人々の心に幼き日の郷愁をさそい、なつかしい母の子守唄がともすると聞え、暗闇にきらめく灯にはっとするような気持を起させ、このせちがらい、とげとげした、醜い社会の一隅にあって香しくと祈る、私の心を少しでも伝えてくれたらと念じつつ、今日も「土」に向う私なのです。

（陶芸家）



# 「児やらい」に想う

土山 忠子

桃の蕾がふくらみ始める三月を迎える頃になると、一つの逸話を感慨深く想い起すのである。それは、「熊は仔熊を三歳まで連れ歩くが四歳の春の雪触けに穴を出るとき、こわい顔をして仔熊を囓んで、その子と別れるのを越後から会津にかけての山地では、ヤラヒといふ、親から離れた仔をヤラヒゴと呼んでいる。」<sup>(1)</sup>という。

熊は、本能的ではあるが、わが仔をつき放して一人立ちさせることの必要と、その時期をきちんとおさえているといえよう。この姿を古い時代には「児やらい」

い」と呼んだ。このことばは、「子どもを後から追い立て、突き出す」という意味があり、大人が前から引張り上げるのではなく、子どもの自発性を重んじ後から見守り応援する態度を現わしている。今日では古語として忘れ去られようとしているが、日本民族学者達の調査・研究によつて貴重な資料が集められている。大藤ゆき氏も「山口県大島では、子どもの世話に悩むことがコヤラエであった。追いまわすだけでなく、大きく成長していく子を母の手から放すことを意味している。」<sup>(3)</sup>と報告されている。

古い時代の母親は、一般的に学問もなく教育的関心も現代とは比較にならない程、低かったといえる。しかし、「子育て」という業は、日本人の生活体験の中から受け継がれてきた伝統的遺産であった。それにひきかえ、現代は過保護・過教育時代であるといわれる。生活は満ちたり、子ども数は少なく、その上、家事労働は電化されて母親はもて余した時間とエネルギーをひたすらわが子の教育に集中させる結果を招いたといえよう。このような時代にあつて「大きく成長していく子を母の手から放すこと」即ち「児やらい」こそ、今日の教育の課題ではないであらうか。

乳児期から幼児期へ、さらに児童期へと依存的存在から自立的存在へと子どもは成長の過程をたどる。昔の人達は、この成長の節にあたる所に行事を用意して

祝った。その一つである「七・五・三の祝」は、三歳、五歳、七歳とその発達段階を区切って成長を喜び、精神的に徐々に自立させようとした意図と態度がみられる。このようにして子どもは、精神的離乳を完成して成熟した大人への道を歩むのである。そのため今、子ども達の過保護な母の手からどこへ「やらう」必要があるのであろうか。

### ●「家」の外へ追いやろう

子どもを物理的にも精神的にも狭い密室の家から、広い外の世界へ追いやり、豊かな生活経験を与えなければならぬ。

#### ①子ども同志の集団へ追いやろう

柳田国男氏が『子ども風土記』の中に、昔の親達は、子どもに遊戯を考案して与えるという事はなかったが、子ども同志で思い切り遊んで大きくなったことを

記している。子ども集団では、年上の子どもは年下の子どもとの世話をやくことによつて、年上の子は自覚をもち、年下の子は早くその仲間に加わろうとして意欲がんだ。また子どもの自治によつて、自分たちで色々と思いついたり考えたりして遊び方を工夫したといわれている。兄弟の少ない現代の子ども達にとつて、子ども同志のふれあひは、人間形成にとつて不可欠の経験であるといわなければならない。今日、幼稚園や保育所での混合保育や縦割保育等の異年齢集団の経験は、本来の意味での子ども集団の姿に近づけようとする配慮であるといえよう。

た時代は、遠い昔の夢になってしまったように思われる。「自然に帰れ」と叫んだルソーの思想にならつて、精巧な玩具の中にうずもれている子ども達をもう一度大自然の中へやらう必要を覚える。

大自然こそは、偉大なる教師であり、子ども達に多くの驚きや発見・感動等を肌で学ばせてくれる。大自然には生命が満ち、成長があり、変化に富み、子どもの創造性や自発性そして思考力を育んでくれるのである。狭い「家」から解放されて「子ども集団」や「大自然」にやられ育った子ども達こそ、二十一世紀の世界に向つて力強く翔いていけることを確信するのである。

#### ②大自然の中へ追いやろう

「とんぼつりきょうはどこまでいったやら」といった自然の中での子どもの姿は、今日では見られなくなってしまった。また「玩具は野にも山にも」といっ

#### (引用文献)

- (1)大藤ゆき著『見やらい』岩崎美術社
- (2)山住正巳編『子育ての書』平凡社
- (3)大藤ゆき著 前掲書(1)

## 卒園児を送り出して思うこと

紀田典子

Yが唄っている！ 皆の前で大きな声で唄っている！ 背を向けていた私は、

思わず振り向きたくなる心を慌てて押さえる。今、眼が合ったら……Yに何かを感じさせてしまいそうで恐い。『ほんとに、うたっているの？』と傍にいた教師に眼で語りかける程度にとどめる。

今日は日曜日、教会学校に來ている小学生と礼拝を終えた後、クリスマスに向けての劇の練習をしているところである。四年生になるYは奴隸を働かせる兵隊の長、の役を引き受けている。

帰りの道すがら、幼稚園時代のYが頭

をよぎる。しゃべることを極端に拒み、

人との接触を持とうとしないYであった。机の下にもぐりこんで皆のあそびをじっとみていることが、いわば彼の「あそび」であった。こちらからの働きかけにも応じないYの姿は、まるで『自分の存在は自分だけが知っていればいいのさ』と言わんばかりであった。勤めて二年目だった私は、彼のそうした行動を頭では認めながらも、待つことのむずかしさを心に覚え、忍耐する力を体中に要求された。

——今、何を感じているのだろう——

——私に向かつて、友達に向かつて、叫びたいことはないのだろうか——

私の悶々とした思いとは裏腹に、Yは毎日元気に幼稚園に通い続けた。そして、「幼稚園はきらいじゃない」と言っていて卒園していった。(雨が降り始めたので傘をさしながら回想はつづく) 照れ屋のYの幼稚園時代の顔に、少し違ったかと思われる今日のYの顔が重なる。そして兵隊長の歌が聞こえてくる。思わず、私の口元がほころぶ。——よかった、幼稚園、たのしくて——口数は少なかったけれど、YはYなりに他の人の知

らないものを見たり、聞いたり、感じたり、味わったりして暮らしてきたことを今、私はYのために誇りに思い、同時に心がなごむのを覚えた。

今までに、たくさんの子供達が卒園していった。私が一人一人にどれ程のことをしてあげられたか、となると胸が痛む。でも、「一緒に暮らした」という事実はかなりの栄養となって今の私に働いている。幼稚園という場で、「私」という一人の人格にAが出会う。Bも出会う。それは裏を返せば、Aという一人の人格に私が出会うことにもなる。そこから双方のつき合いが始まる。出会いの仕方がそれぞれに異なるように、つき合いもまた、AにはA、BにはBのやり方がある。私の方も「自分」を必死で保ちながらAやBやC達とかかわりをもっていく。一緒に手を取り合うこともあれ

ば、陰で見ていることもある。見ないふりもしてみるし、時には自分の思いを相手に伝えたりもする。

そうした全てを子供達は一応受けとめ、あとはそれぞれ自分達の持っているものに合わせて消化させていく。それらが、いつもおいしい食物であるとは限らない。まずいものも、嫌いなものも食べなくてはならないこともでてくる。その時には、多くの母親が我子に食べて欲しいと願って工夫を凝らすのと同じように、私達もまた、形を変えたり方法を考えたりする努力をしなければならぬ。それでも、大人の過度な要求があったり、子供達が自分自身で解決しにくい問題が起こると、彼らはそれを全身で受けとめることが出来なくなり消化不良を起しやすくなる。それを助けることはできて、身がわりにはなれないつらさを

知っている私達は、子供達の力を信じて励ましていける心をいつも備えていたいと思う。

小学校に進み、やがては中学生となっていく一人一人の子供達の成長の過程においても大人である私達は備えつつけていたい。「苦い」と思っても、すぐに、吐き出してしまわないで、自分の歯でしっかり噛みくだし、自分のものとしてのみこめる日が来ることを心待ちにしながら。そしてそれが生きていくうえで、次の栄養となって、力が与えられるようにお願いながら。

今日のYを見ていて、幼稚園での二年間の日々が、又私達とのかかわりが、幼なかつたYの心に、そのような一粒の種をまくことが許されたのであったならば、教師としてとても幸せなことだと心から感じている。(武蔵野相愛幼稚園)

## ルソーの夢

——むすんでひらいて考——（その十八）

海老沢 敏

### 十一、日本人の歌として（承前）

《グリーンヴィル》は、すでに述べたようにバプテスト教会系の最初の讃美歌集《聖書之抄書》において、はじめて讃美歌として日本で紹介されたものであったが、さらに一致教会系の《改正讃美歌》にも、そしてまたメソジスト教会系の《讃美歌一》にも、あるいは組合教会系の《さんびのうた》にも、その姿を見せられている。こうしたプロテスタント系教会各派の活動の中で、一致教会系と組合教会系とが協同して編集作業をおこない、統一的な讃美歌集の刊行に成功したのは明治二十三年十一月のことであった。明治十九年の春、両教会が委員を出しあって、こうした新し

い讃美歌集の編集がはじめられた事情については、その努力の結実として生まれた《新撰讃美歌》<sup>(注15)</sup>の《序》に詳しい。この《新撰讃美歌》の実質的な編集作業は組合教会の松山高吉（一八四六一—一九三五）、一致教会の奥野昌綱（一八二三—一九一〇）、および植村正久（一八五七—一九二五）の三人に、とりわけ音楽面で協力した組合教会のジョージ・オルチン（一八五二—一九三五）が加わっておこなわれたものである。

（注15）《新撰讃美歌》編輯讃美歌委員 明治二十三年十一月刻成。この讃美歌集には次の覆刻版がある。〈神戸女学院図書館所蔵・オルチン文庫版・覆刻「新撰讃美歌」解説付〉（一九七九年、新教出版社）

この《新撰讃美歌》は既に出版されていた両教会系の讃美歌集

「第十五 禮拜 閉会

に収められていた讚美歌を中心にしながらも、その他の派の歌集からも優れた作品を採り入れ、それらの歌に推敲を加えたり新訳(注16)や新作をつけ加えたものであった。そのような新しい讚美歌集であ

あってみれば「文体はやや固いが、オーソドックスで確固たる信仰を表現しているだけでなく、当時としては進歩的なスタイルを示し、文学的にも宗教的にもすぐれた讚美歌が多い」と評価されるのは当然といえよう。そればかりでなく、この讚美歌集は「キ

リスト教界だけでなく、新体詩運動などで新しい方向を模索していた文壇にも少なからぬ影響を与えたことは、この歌集に収録されて

いる歌を模した詩が当時の若い詩人たちの作品に、かなり見られることによっても裏付けられる」(注18)のだ。それは島崎藤村、蒲

原有明、薄田泣菫などの詩に直接間接な反映を示しているのである。

(注16) 原恵〈覆刻 新撰讚美歌 解説〉(一九七九年、新教出版社)四ページ。

(注17) 同右書四ページ。

(注18) 同右書四ページ。

《新撰讚美歌》には合計二六三曲の讚美歌が収められているが、その第十五と第一七一にはかならぬ《グリーンウィル》グリーンウィルの曲名がつけられている。

一、主よみめぐみもて われらにこそぎ

よろこびにみちて みまへをさらせ

あいのはたらきを 世になさしめよ

二、ちよなるみかみの とともに在すを

こころにみとめて おこなふわざに

いよゝあきらけく 世にしらしめよ

三、うけし聖言は こころの畑に

よき果をむすびて いよゝしげく

あめなる庫に たくはへしめよ

「第七十一 信徒生活 エホバの導き

一、あゝ皇きみのきみなる エホバのかみよ

あれのにまよへる われはたびびと

マナのごとく天てんの かねをふらせよ

二、つきせぬいづみの ながれをしたひ

たちのほるくもの はしらをたのミ

みちびくひかりと ともにゆかまし

三、エホバよみたまの ヨルダンのかはを

わたりておそれず アナンのみくにへ

すゝみてゆくべき みちををしへよ」

《グリーンヴィル》によるこの二つの讃美歌のうち《第一五〇

の歌詞はジョン・フォシット作の《Lord, dismiss us with Thy

blessing》が原詩であり、この翻訳は松山高吉であった。(注19) もうひ

とこの《第一七一〇》の歌詞《Guide me, O Thou great Jehovah》

も、原詩はウィリアム・ウィリアムズの作といわれるもので、こ

れが《ルソーの夢》と最初から結びついていたものであることは

へ八、讃美歌としての《ルソーの夢》ですでに述べたことであ

る。ちなみに訳詩は奥野昌綱である。(注21)

(注19) 本稿へ八、讃美歌としての《ルソーの夢》参照。

(注20) 原恵、同右書七ページ、

(注21) 原恵、同右書七ページ。

《第一七一〇》の《あゝ皇のきみなる》は、すでに紹介した《改

正讃美歌》(一致教会系)の《第十八〇》の《あゝきみのきみなる》

に推敲を加えたものであることは明らかである。《グリーンヴ

ィル》につけられたこの二つの詩は、いずれもへ八七八七八七〇

というヘミーターすなわち詩形音節数をもっているが、ここで

は《新撰讃美歌》の《グリーンヴィル》の旋律を掲げておこう

(譜例①)。これは《第十五〇》であるが、曲譜は《第一七一〇》でも  
まったく同一である。この《グリーンヴィル》の稿は、へ八、  
讃美歌としての《ルソーの夢》の異稿対照表の②にあたるもの  
である。

《新撰讃美歌》全体についていえることであるが、この讃美歌  
集はいわゆる《混声四部合唱》のかたち、すなわち四声体をとっ  
ている。これは欧米の讃美歌集ではすでに常識のことであった  
が、日本でもようやく明治十年代の終りごろからこうしたかたち  
が定着するのである。(注22)

(注22) 原恵、同右書三ページ。

こうしてルソーの夢は、明治初年にはやくも讃美歌の旋律とし  
て、《グリーンヴィル》という曲名チュニクでわが国にもたらされたあ  
と、十数年後の明治二十三年には《新撰讃美歌》中の二つの讃美  
歌の節という形で、教派という枠を越えて出た日本の讃美歌として  
位置づけられ、より広い層に受け容れられるという結果をみたの  
であった。《グリーンヴィル》という曲名だけでは、それがだれ  
の手になるものかといった由来について知られることは一般には  
考えられないであろう。したがって、まだこの時点では《ルソー》  
の名はこの讃美歌には結びつけられていなかったといってもよ  
い。しかしながら《ルソーの夢》が、明治十年以前から讃美歌と

▼ 譜 例 ①

15. GREENVILLE. 378787.

Lord, dismiss us with Thy blessing.

FINE.

主よみめぐみもてわれらにうよめ  
あはれのほたらしにさしめよ

D. C.

よろこびみちてみまへをさらせ

○ 第 十 五 禮 拜 閉 會

- |                           |                              |                           |
|---------------------------|------------------------------|---------------------------|
| 一                         | 主よみめぐみもて                     | わをらみろとせ                   |
| 二                         | よろこびみちて                      | みまへをさらせ                   |
| 三                         | わいのほたらきを                     | 世みまらしめよ                   |
| 一                         | ちなるみかみの                      | どもに在すを                    |
| 二                         | ころみどめて                       | おこなふわざを                   |
| 三                         | いよゝわきらけく                     | 世みまらしめよ                   |
| 三                         | うけし 聖言 <small>みことば</small> の | ころの畑 <small>はたけ</small> を |
| あめなる庫 <small>くら</small> を | よき果 <small>み</small> をむすびて   | いよゝまげく                    |
| たくそへしめよ                   |                              |                           |



して伝来し、明治二十年そこそこの時期には、これがひろく讚美歌として歌われはじめたことだけは確実なのである。

ところで、その間には生まれた明治十年代に、この旋律は小学唱歌というかたちで、讚美歌とはジャンルのことなる別の種類の歌として、私たち日本人の歌となったことは、本稿の第三章（三、小学唱歌《見わたせば》）において詳しく述べたとおりである。

小学唱歌としての《ルソーの夢》、すなわち《見わたせば》についての考察は、また本稿の出発点でもあった。私たちは《見わたせば》の問題から、フランスやイギリス、あるいはアメリカ、あるいはその他の国へとこの旋律が辿った旅路を辿り直してきたのであったが、ふたたび私たちの国日本へと帰り着いたところで、小学唱歌としての《ルソーの夢》、《見わたせば》に関しても若干の補足をつけ加えておくべきであろう。

伊沢修二はアメリカ合衆国に留学するに先立って、愛知師範学校校長の職にあったころ、すでに早くも《唱歌嬉戯》の初等教育における重要性を認識していたことはすでに述べた。彼が幼児の教育の中で、歌や遊びがきわめて重要な役割を果たしているのを理解したのは、明らかにフレーベル主義の児童観の中でであり、そうした中で《遊戯歌》の試みも残したものであった。彼は留学以前に、英米系のフレーベル主義の教育論に親しんでいたことは明

らかである。その伊沢が留学したのはマサチューセッツ州ボストンであった。この地こそ、米国籍のフレーベル主義幼稚園の活動の中心地でもあったのである。彼がその地で幼稚園の実際をつぶさに見聞したものが否かは明らかではないが、その可能性も完全に否定することはできないであろう。伊沢がブリッジウォーターの州立師範学校に入学したのは明治八年（一八七七年）九月のことであったが、ここで彼にとってはまったく異質的な教科としての音楽を免除しようというボイデン校長の配慮に対して、彼伊沢が逆にそれを口惜しがり、あえてそれを謝絶したというエピソードはまことに名高い。それはさて置くとしても、伊沢が留学した米国にあってさえ、音楽が公教育の中に正規の教科として位置づけられたのはさほど古いことではなかったのである。伊沢修二が帰国した明治十一年（一八七八年）に留学生監督官目賀田種太郎と連名で文部大輔田中不二麿に提出した文書に《学校唱歌ニ用フベキ音楽取調ノ事業ニ着手スベキ、在米国目賀田種太郎、伊沢修二ノ見込書》<sup>(注23)</sup>なる文書がある。この上申書の別紙に、目賀田種太郎一人の署名をもつ《第二我公学ニ唱歌ヲ興スベキ仕方ニ付私ノ見込》という文書があり、かなり詳細に亘る説明がおこなわれているが、実際には伊沢が執筆したものとと思われる。<sup>(注24)</sup>その中には次のような一節がある。<sup>(注25)</sup>

(注23) 信濃教育会編《伊沢修二選集》(昭和三年、信濃教育会刊)二四四ページ—二五〇ページ。

(注24) 同右書、二四五ページ。

(注25) 同右書、二四六ページ—二四七ページ。

〔当国ニテ唱歌ヲ学校ニ採用セシハ実ニ晩近ニテ『ポストン』  
府ニテハ千八百五十七年ニ始メテ其ノ事務局中ニ唱歌ノ課ヲ置ケ  
リ。当時人未ダ唱歌ノ功力ヲ知ラズ、之レヲ公学ニ一学課トセシ  
ト雖モ、其教授法モ定マラス、其ノ教師モ乏シカリキ。溯リテ当  
時ノ報告類ヲ見ルニ小学ノ幼童ニ高尚ノ歌詞ヲ教ヘ又ハ街頭  
ノ鄙猥ナル俚謡ヲ教ヘナドシ、其ノ不都合ナル形況実ニ一笑ニ付  
スベキアリ。同府事務局殊ニ其ノ監督フィリップリック氏主トシテ  
之レヲ憂ヘ事ノ実ニ措クベカラザルヲ知り、終ニ千八百六十四年  
ニ及ンデ、シンシンナタイ府ヨリ其ノ音楽教師タリシ『ルーサル  
・ホワイチング・メイソン』氏ヲ招聘セリ。氏ハ夙ニ音楽ヲ公学  
ニ施スノ術ヲ創メシ人ニシテ其ノシンシンナタイ府並ニ他処ニ為  
セシ処多カリシガ、亦其ノポストン府ニ尽セル処最著明ト言フベ  
キナリ。(監督雜誌第十号三十六葉唱歌ノ件ヲ見ヨ)當時ポストン  
公学ノ音楽ノ形勢前ニ記セシガ如キモ、今既ニ其利当国ニ冠タ  
リ。斯カル形情ヲ致セシハ単ヘニ、メイソン氏ノ功ナリ。此ノ所  
由ヲ問フニ氏ノ長ズル処ハ全く前記ノ如ク其ノ教授法モ定ラズ、

唱歌ヲ学校ニ用フベキヤノ問ニモ未ダ究ムル能ハザル、我国ノ今  
ニ於ケルガ如キ草創ノ時ニ方リテ、欧罷也諸国ニテ最モ良キ古今  
ノ曲調、歌詞ヲ採択シ、米国ニ在来スルモノト和シ、又欧罷也諸  
国ノ音楽教授法ヲモ合シ、一ツノ創新ナル制ヲ發明シ、終ニ広ク  
公学ノ音楽ヲ取立テ善良ナル楽曲ヲ流布セシメシニ在リ。從テ当  
時諸他多ク此例ヲ次ギ其ノ公学ニ唱歌ヲ始シナリ。故ニメイソン  
氏ノ掛図並ニ教授法ノ如キ世ニ用キラル、処多シ。嚮キニ閣下ポ  
ストンニ購入セシハ即チ此ノ掛図ナリ。

夫レ既ニ前ニ述ブルガ如ク唱歌ノ功力明カニシテ其ノ米国ノ公  
学ニ行ハル、コト実ニ晩近ニ屬ス。此レヲ以テ考フレバ此事ヤ実  
ニ我ニ施スベキガ如シ。

この文章からも明らかのように、アメリカにおいても、音楽教  
育が唱歌教育のかたちで学校教育の中に位置づけられたのは、伊  
沢の米国留学にさかのぼることわずか十年余でしかなかったのだ  
である。ポストンがそうした唱歌教育に対する公的な活動を開始し  
たのも一八五七年と述べられているが、まさにこのころ米国にお  
けるキンダーガルテンの教育活動が、それもここポストンを中心  
に力づくよく押し進められていったのを私たちはすでに見てきた。  
そのアメリカ・キンダーガルテンでも、『ルソーの夢』は『遊戯  
歌』として歌われていたし、本稿第四章(四、『ルーサーウ氏が睡

眠中夢に作りたる曲」でも論じたように、ほかならぬメイソン自身が、初等中学校高学年ならびに中学校用の音楽教科書《アップライジド・フォース・ミュージック・リーダー》の中に讃歌美の歌詞を伴った《ルソーの夢》を収録したのは、奇しくも伊沢修二のポストン出立の年一八七八年（明治十一年）であったのである。

そればかりではない。ポストンではやくも一八二〇年代ごろ、《ルソーの夢》の旋律の原形にもとづく《不在》が出版されており、この旋律は、ここニュー・イングランドにあつてはさまざまなかたちで親しまれていたのだ。伊沢修二がそのポストンにあつて、この《ルソーの夢》の旋律に親しむ機会に恵まれていたことは十分に考えられるのである。

本稿第三章（三、小学唱歌《見わたせば》）ならびに第四章（四、《ルーサウ氏が睡眠中夢に作りたる曲》）で、メイソンおよび伊沢修二を中心とした文部省音楽取調掛の面々が《小学唱歌集》の編集に対してどのような資料を、この《見わたせば》に関して用いたかについて触れたが、この面についてもひとつ補足を試みておきたい。東京芸術大学附属図書館が編集した《音楽取調掛時代（明治一三年——明治二〇年）・所蔵目録（1）洋書・楽譜》（一九六九年）の中には、ジェームズ・カリーの《適切な旋律付

▼ 譜 例 ②

No. 12 LORD, A LITTLE BAND AND NOWAY.

The musical score is written on four staves. The first staff is the treble clef melody. The second staff is the bass clef accompaniment. The third and fourth staves are additional parts, likely for a second voice or instrument. The key signature has one sharp (F#) and the time signature is 2/4. The music is simple and melodic, typical of a school song.

き幼稚学校讚歌美および歌曲<sup>(注26)</sup>なる三〇ページほどの小冊子がある。英国エジンバラのトマス・ローリーなる教科書出版社が刊行したこの歌曲集は一八六五年刊と考えられるが、歌詞の第一部と旋律の第二部とから成っているものである。収録された旋律は合計三二曲あるが、その第十二曲がほかならぬ《ルソーの夢》の旋律である。ホ長調・四分の二拍子をとるこの《ルソーの夢》は原曲にかなり近いかたちを示しているもので（譜例㉔）、《主よ、小さな群でつしましやかに、私たちはあなたを讃えて歌いこやうとせよ》<sup>(註27)</sup>。Lord, a little band and lowly, we are come to sing to Thee》なる歌詞に合わせて歌われるものである。

(注28) 《Infant School Hymns and Songs with Appropriate Melodies. By James Currie, A. M. Part I.—Hymns. Thomas Laurie, 63 Princes Street, Edinburgh.》(Laurie's Kensington Series.) (東京芸術大学附属図書館D八七・一、C七九六)

音楽取調掛が、讚美歌としての《ルソーの夢》、すなわち《グリーンヴェール》を含むこうした曲集を所蔵していたことも従来明らかにされていなかったが十分注目されてしかるべきではなからうか。(ついで)

(国立音楽大学)



## 保育者養成における

### シミュレーション的手法の利用

阿部 智江  
志賀 政男

#### 一、はじめに

ここ数年来、各界における教師教育への関心がとみに高まっている。昭和五十三年九月に出された教員養成審議会の答申や、各教育関係学会のシンポジウム・分科会において、教育実習の在り方、教職課程の内容、現職教育の在り方などについて、数多くの検討や討議が加えられてきており、これからの研究と実行に待つものが多い。

教師養成を考える場合、学生が教育の理論と具体的実践との対応関係を学習して初めて、教師としての基礎が培われるものと思

われる。しかし現実には、理論と実践の統合の機会にはなはだ少ない。

本研究は、教育の理論と実践とのこのギャップを埋めるために、現行制度の中で出来る一試行として、四年間に亘って研究をすすめてきたものである。本研究では、大学の授業で学んだ教育の概論や原理を裏づけたり、またその理解を助けるための具体的な例を数多く集めて、理論と実践との対応関係の中で、幼児と保育についての理解を深めることをねらいとした。

このようなねらいを達成するための方法として、本研究ではシミュレーション的手法を用いた。シミュレーションとは、本研究

の場合、教育現場に似た状況下で、教師としての種々の場面の練習をすることであり、この方法によれば、学生は、保育場面や幼児に対する不安や恐怖感なしに、具体的な問題場面や特に重要と思われる保育場面を抽出して研究することができる。また、適切なフィードバックを得ながら保育者としての経験ができるので、すでに学習した教育理論を保育の実際場面に照合しながら統合して考えてゆけるなど、教授行動の習得・形成の上で、多くの利点をもった方法である。

ちなみに、幼稚園就職前の学生に、不安項目を列挙させたところ、表1のようであった。その内訳は、父兄との接し方、幼児との接し方、教師仲間の人間関係、幼児の指導方法……など、幼児理解や保育展開の問題のみならず、人間関係、種々の保育情報など、保

表 1 就職前学生の不安項目 (1976~1979)

- |     |                         |
|-----|-------------------------|
| 1.  | 父兄との接し方                 |
| 2.  | 幼児との接し方 (けんか、遊び、集中、個人差) |
| 3.  | 他の教師との接し方               |
| 4.  | 幼児への言葉かけ、話し方            |
| 5.  | うた・リズム・楽器に関すること         |
| 6.  | 絵画製作に関すること              |
| 7.  | いろいろな導入のしかた             |
| 8.  | 幼児のけが、病気に関する知識、処理法      |
| 9.  | 入園式当日のことや、それまでの種々の準備    |
| 10. | ゲーム・手あそびなど              |

育に関する広範囲のとり組みの必要性が伺えた。そこで、本研究におけるシミュレーションの手法としては、三つの方法——①実態把握と幼児理解のためのビデオ・インフォメーション、②保育計画と実際指導、そして自分の保育の見直しのためのマイクロテーピング、③人間関係の変革と教師行動の具体的理解のためのロール・プレイング——を用いた。教師養成に関する先行研究の中には、右に挙げた方法の一つを単独におしすすめたものはいくつかあるが、三方法を総合的に用いた研究はこれまでになく、それぞれのねらいと効果を組み合わせて、複雑な教師活動の本質的理解をめざしたところに本研究の特徴がある。

## 二、研究目的

シミュレーション的手法を用いることにより、教育の理論と実践との統合化のためのプログラムを開発することをねらいとする。

## 三、研究方法

対象は、短期大学二年次学生で既に幼稚園就職が決定している者一七名(昭和五十一年五二名、五十二年三三名、五十三年二〇名、五十四年一二名)。

本研究の実施手順は図1に示すとおりであり、シミュレーション的手法として用いた三方法のそれぞれの利用のねらいと課題場面の一覧は表2のとおりである。本研究で採用したシミュレーションの考え方は、カーシュ、タンゼイらのシミュレーション理論を基礎にしているが、三方法の理論的背景および方法の概略は次に述べるとおりである。

(1) ビデオ・インフォメーション

映像によるモデリング効果については、バンデューラ、オームらの先行研究があるが、本研究では、ビデオの画像を用いて、幼児理解・実態把握や各種の保育場面の情報を提示する。内容として

図1 本研究の実施手順

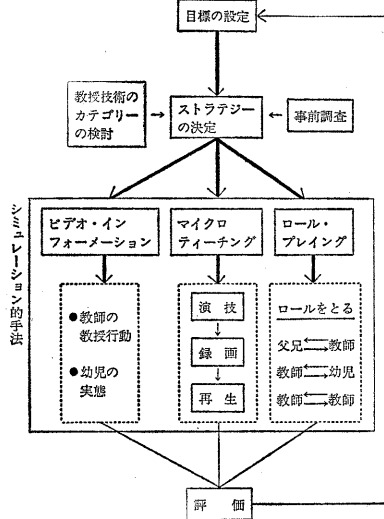


表2 本研究におけるシミュレーション的手法

| シミュレーションの方法      | 利用のねらい                                                                                                                                                                                        | 研究のための課題場面                                                                                                                      |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. ビデオ・インフォメーション | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 基本的知識の獲得</li> <li>● ポイントをおさえたり、特徴をひろい出す</li> <li>● 幼児の実態や園の実態を知る</li> <li>● 多様な指導方法を知る</li> </ul>                                                    | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 体育の基本指導</li> <li>● 幼児や園の実態</li> <li>● 幼児の個人差</li> <li>● 教師（経験者）の実技</li> </ul>          |
| 2. マイクロティーチング    | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 客観的に具体的に指導方法の検討をする</li> <li>● 教授行動における問題点を明らかにする</li> <li>● 教授行動に対する修正フィードバック</li> </ul>                                                             | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 各教授行動の実技</li> </ul>                                                                    |
| 3. ロール・プレイング     | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 教材研究を通して、指導技術を高める</li> <li>● 重要な情況場面での教師行動の研究</li> <li>● 教師行動の実際体験</li> <li>● 幼児・父兄の心理や理解力を把握する</li> <li>● 自主性・表現力の昂揚</li> <li>● 教師としての自覚</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 各保育場面での教師役</li> <li>● 幼児のロール</li> <li>● 父兄と教師のロールプレイ</li> <li>● 教師同志のロールプレイ</li> </ul> |

は、発達段階による幼児の活動や個人差をとらえたもの、体育や音楽の基本指導場面・各種保育場面における指導と展開例などが含まれる。

## (2) マイクロティーチング

マイクロティーチングは、一九六三年にスタンフォード大学で始められた。これは、教師の実際の練習と授業技術の訓練をねらいとして考案されたもので、教育の理論と実践とのギャップを埋める一方法として発展してきた。マイクロティーチングの特徴として、アレンとライアン（一九六九）は次の点を指摘している。

① 教授場面は人為的であるが、そこで行なわれる授業は本物の授業である。

② 通常の教室教授の多様性を縮小したものの。

③ 特定の課題の訓練に焦点をしぼる。

④ マイクロティーチングの練習場面では、教授場面の要因を操作できる。

⑤ マイクロティーチングでは、教授のあとに多くのフィードバックが得られる。

本研究におけるマイクロティーチングの実施手順は、保育の一場面を抽出して、保育計画の作成↓保育↓フィードバック↓保育計画や指導方法の練り直し↓再保育、の過程をくりかえす。

## (3) ロール・プレイング

ロール・プレイングは一九一〇年前後にモレノが始めたサイコドラマの一方法である。ロール・プレイングでは、現実の問題場面を模倣的に簡単な劇の形で再現することによって、参加者がそれぞれの役割や人間関係などを理解していくものである。本研究では、ロール・プレイングを通して、幼稚園という教育現場における人間関係（すなわち、教師↕子ども、子ども↕子ども、教師↕教師、教師↕父兄、父兄↕子ども）の概要を把握し、それぞれの役割が抱えている問題や相互関係を探究すること、および、保育場面における教師と幼児の関係理解を深めることをねらいとしている。

## 四、研究結果

### (A) シミュレーションの効果と特徴

本研究で用いたシミュレーションの三方法の、保育における教授行動の訓練・形成に及ぼす効果を、参加者の自由記述によって整理すると次のようになる。

#### (1) ビデオ・インフォーメーション

① 子どもに接する機会が少ないので、幼児の実態把握に役立つ。



② 指導方法、教材の扱い方、展開方法がいろいろあることがわかる。

③ 専門家や先輩の指導方法を見ることにより、指導のポイントが把握できる。

④ いろいろの保育技術や保育に役立つ知識を映像と音声によって具体的に確認できる。

(2) マイクロテーピング

① 他人に注意・批評されるよりも、教師としての自分の姿を映像から確認した方がよくわかる。

② 自分のくせ、声の大きさやスピード、話し方、表情、展開のしかたがはっきりわかり、反省できる。

③ 自分の保育場面を冷静に客観的に把握できる。

④ 指導場面や指導方法が種々あることがわかり、また、十分な準備と臨機応変の対応の仕方が必要であることがわかった。

⑤ 教師役の経験ができたので、子どもの前に立つ不安が少し解消した。

⑥ 教師としての自覚ができた。

(3) ロール・プレイング

① 理論だけでは理解できなかったことが、実際にやってみて少しわかってきた。

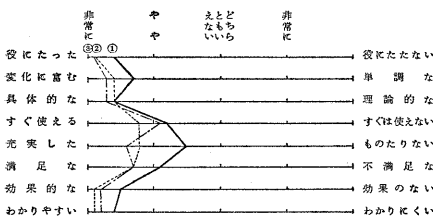
② 子ども・教師・父兄の役割をやってみて、それぞれの心理が理解でき、対応のしかたがわかる。

③ 実際に教師役をやってみて、具体的に指導のポイントや言葉かけのタイミングが体得できる。

④ 実際に保育場面をやってみて、子どもの状態や反応が理解できるところようになった。

⑤ 場面を設定されることにより、次の展開が予想できるようになった。

図2 三分法の効果比較



① 映像を通して、幼児の個人差や活動の様子を知る。(ビデオ・インフォメーション)  
 ② 指導場面をビデオでとり、保育技術や態度を批評し合い修正する。(マイクロテーピング)  
 ③ 教師・子ども・父兄のロールをとり、その心理や理解力の把握につとめる。(ロールプレイング)

⑥ 指導方法がいろいろあることがわかる。

⑦ 子ども役をやってみることににより、幼児の心理や理解力の程度がわかる。

⑧ 保育者という仕事の内容が複雑で多様であることがわかる。

(B) 三方法の効果比較

シミュレーションの三方法(①ビデオ・インフォメーション、②マイクロテーチング、③ロール・プレイング)の効果を調べるため、SD法で評価させたものが図2である。図のように、①ビデオ・インフォメーションよりは、②マイクロテーチングや③ロール・プレイングの方が、参加学生にとって、具体的に効果的であったことがわかる。これは、受身の形で画像からの情報を受けるよりは、実際に教師役をやってみたり父兄や幼児の役割をとってみるなどの能動的な体験を通した方が、また具体的なフィードバックを得る方が、教授行動の訓練・形成に効果があることを示している。

(C) シミュレーションによる教師および幼児についての理解

マイクロテーチングおよびロール・プレイングが、ビデオ・インフォメーションよりも具体的に効果的な訓練方法となりそうであることは前項で述べた。その二方法を通して、参加学生が教師と幼児のそれぞれについて、教師役割・幼児役割からわかっ

表4 「幼児」に関するシミュレーションによる理解

| 子供役からの確認事項                                                                                                                                                                                                                      | 教師役からの確認事項                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>○子供は興味をもてば、それをやり易いし、やってみたい気持ちになる</li> <li>○子供は先生をよく見ている。見たことを覚えることが多い</li> <li>○子供は、先生に自分をみてもらいたいと思っている</li> <li>○先生が一方的におしつけてくるような話し方をしたくない</li> <li>○先生のわかりにくい言葉や難しい話はつまらない</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>○子供は興味がないことにはあきてしまう</li> <li>○子供は教師のするとおりにまねをし吸収する</li> <li>○大人のことばのままでは通じない(見体が必要なことばや例が必要)</li> <li>○子供は、教師の予想外の反応や言動をすることがある</li> <li>○子供を教師や教材の方へ集中させることは大変である</li> <li>○子供は、一度にたくさん覚えられない。(毎日少しずつ、徐々に、段階を追って指導することが大切)</li> </ul> |

表3 「教師」に関するシミュレーションによる理解

| 教師役からの確認事項                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                | 子供役からの確認事項                                                                                                                                                                                                                                                           |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>○子供の興味関心がどこにあるかよく知って子供にわかりやすく、生活に即した話題を投げかけることが必要</li> <li>○多方面にわたる種々の知識が必要</li> <li>○子供の考え方や反応が予想できることが必要</li> <li>○話すことで、簡潔にわかりやすく話さねばならない</li> <li>○子供のいろいろな反応や個人差に対処できる柔軟性や臨機応変の指導も大切</li> <li>○一方通行にならぬよう子供を参加させながら展開できるような工夫も必要</li> <li>○子供の前に立つ前に十分な準備と練習が必要</li> <li>○明るい表情・落ちついた態度で、自信をもって子供に接することが大切</li> <li>○話し方、声の調子、抑揚、間のとり方も留意しなければならない</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>○子供が興味をもつような話し方や話題が必要</li> <li>○わかりやすいことはばで話してほしい</li> <li>○子ども1人1人を認めて丁寧に扱うことが大切</li> <li>○硬い表情・頼りない態度は、子供を不安にさせる</li> <li>○単調な話し方・無表情はつまらない</li> <li>○明るい声や表情・おだやかな態度が安心できる</li> <li>○子どもは教師の言動をよく見ておりいろいろと感じている</li> </ul> |

たことを整理したものが表3及び表4である。

「教師」に関していえば、たとえば、「幼児の発達段階と保育方法の関連の重要性」を理論的には理解していた学生達が、二方法を通して、体験を通して、表に述べるような具体的な理解を深めた。また、「保育の複雑性・多様性・困難性」についても、マイクロティーチング、ロール・プレイングの実践が、幼児の行動の予測と対処の方法把握に役立つことが示された。

「幼児」に関して、二つのシミュレーション的手法を通して、学生は、幼児の状態や能力について実際場面で理解でき、さらに、幼児が教師をどのように把握しているかを知ることが

図3 マイクロティーチングにおける変容

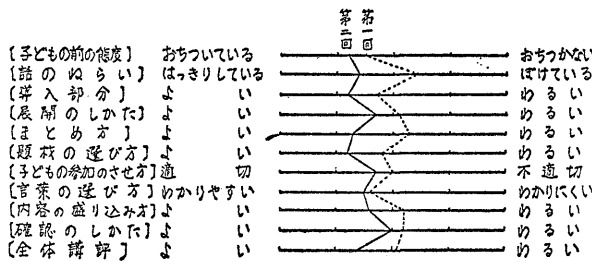


表5. シミュレーションの三方法のねらいと効果の一致度

| シミュレーションの方法  | 期待される利用のねらい | 1                  | 2       | 3         | 4              | 5           | 6               |
|--------------|-------------|--------------------|---------|-----------|----------------|-------------|-----------------|
|              |             | 臨機応変の考え方や行動の必要性を知る | 知識の獲得   | 種々の保育技術や  | 幼児の心理や状態の具体的把握 | 指導上のポイントの把握 | 自分自身の所作や保育技術の確認 |
| ビデオインフォメーション | 体育の基本指導     | 9%<br>0%           | 41<br>5 | 18<br>0   | 32<br>95       | 0<br>0      | 0<br>0          |
|              | 幼児の個人差      | 0<br>0             | 5<br>0  | 45<br>100 | 50<br>0        | 0<br>0      | 0<br>0          |
| マイクロティーチング   |             | 0<br>16            | 0<br>0  | 0<br>0    | 0<br>0         | 100<br>84   | 0<br>0          |
| ロール・プレイング    |             | 21<br>75           | 5<br>0  | 0<br>0    | 11<br>0        | 0<br>0      | 63<br>25        |

(◎は研究者の意図、上段は実施前、下段は実施後の結果を示す)

できた。

(D)教授技術の変容

マイクロティーチングによる教師の教授技術(ここでいう技術とは、単なるテクニックではなく、保育者としての配慮・態度・必要な指導技術までを含んだものを指す)の変容をみるため、二回の教授場面を評価したプロフィールが図3である。この際、第一回の後、学生へのフィードバック源としては、ビデオ画像・自

図4 シミュレーション前

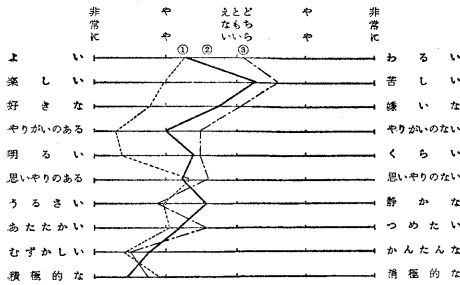


図5 シミュレーション後

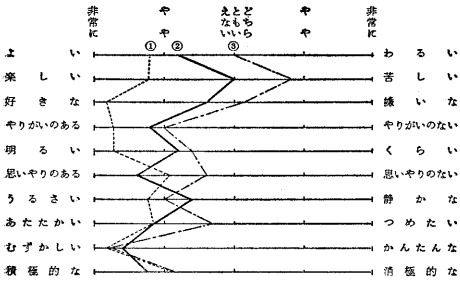
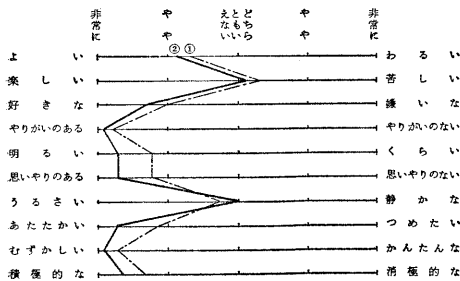


図6 幼稚園教師のイメージ



己評価・他の観察者からの批評・指導者からの助言があり、その後二回目の教授を行なった。その結果、ねらいの明確化、内容の展開のしかた、まとめ方について、二回の教授場面間に大きな差があり、また他の項目に関しても二回目の方にプラスの変化がみられた。

(E)シミュレーションのねらいと効果の一致度

三方法によるシミュレーションが、筆者の意図した利用効果をあげているかどうかを検討するため、課題提示前の予想と提示後

の調査を行なったものが表5である。これらの結果から次のことがいえる。「シミュレーションの手法として用いた三方法は、それぞれ研究者の意図した利用のねらいと利用者の使用効果とが一致しており、三方法は教授行動の変容にそれぞれ有効な手段であるといえる。すなわち、この三方法は、それぞれのねらいに結びて組み合わせるにより教授行動の訓練・形成に効果がある。

(F)シミュレーションによる幼稚園のイメージの変化

図7 幼稚園の父兄のイメージ

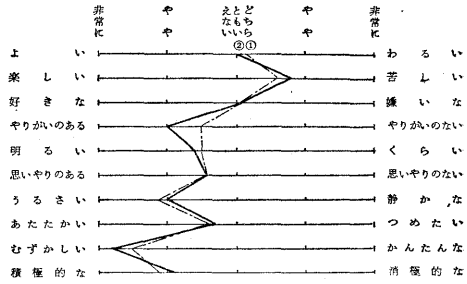


図8 幼稚園の子どものイメージ

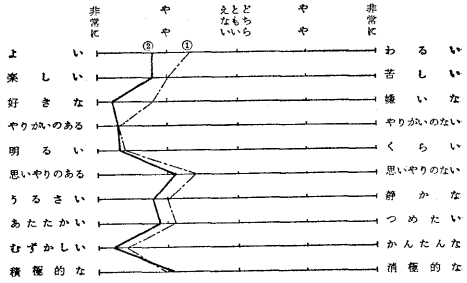
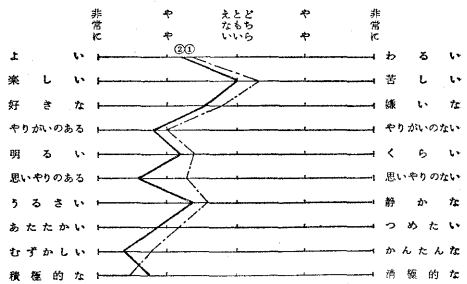


図9 幼稚園の園長や主任のイメージ

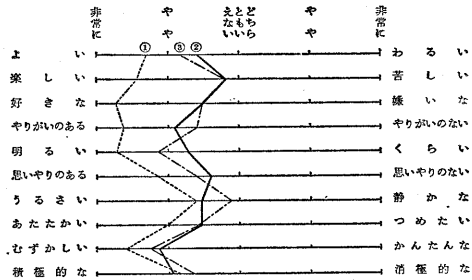


幼稚園就職前の学生が幼稚園にどのようなイメージをいだいているかの調査を、シミュレーションの前後に行ない、さらに一年後にも行なった。幼稚園の子ども・教師・父兄・園長や主任の四概念についてSD法で測定した。まず図4はシミュレーション前のイメージであり、就職直前の学生の不安と期待の実態を示しているが、特に「③幼稚園の父兄」をマイナスイメージでとらえている。さらにシミュレーション前後の変化については図5から図9に示すとおりであり、幼稚園の教師・子ども・教師について

は、シミュレーション後のプラス方向への移動がみられるが、幼稚園の父兄(図7)に関してはわずかではあるがマイナス評価がみられた。これらの結果は、シミュレーションを通して、幼稚園教育に関するマイナスイメージをプラス方向に変化させることの可能性を示していると同時に、「幼稚園の父兄」に関しては就職前の学生の疑問がまだ残されたままであることを示している。さらに、幼稚園就職一年後のイメージ調査(図10)では、就職前のイメージが変化しており、職場で毎日顔を合わせる園長や主任に

図10 幼稚園就職一年後のイメージ

- ①幼稚園の子ども
- ②幼稚園の園長や先生
- ③幼稚園の父兄



対してマイナスイメージが最も顕著であった。

## 五、まとめ

以上の結果から、次のことが明らかになった。

①今回用いた三つのシミュレーション的手法は、それぞれのねらいと課題場面に合わせて用いることにより、複雑な教授行動の訓練・形成に効果がある。

②ビデオ・インフォrmーションは、具体的な映像モデリングを

通して、学生の幼児理解や指導上のポイント把握に有効である。

③マイクロティーチングを通して、学生は、保育の設計・実際指導・フィードバックによる保育の見直しを行なうことが出来、教授技術の習得と自己修正・保育の設計と再編成など、教授行動の全体的理解を深めることができる。

④ロール・プレイングにおいては、人間関係の具体的理解、教師としての留意点の把握、幼児の心理と行動の理解に役立つ。

⑤保育の詳細な面まで、シミュレーションを通して確認・理解できるので、学生は、教師としての意識をたかめることができ、また、それぞれの保育場面や幼児の状態に適合した教師のかかわり方や指導方法を体験・確認できる。

⑥教師としての漠然とした不安が、シミュレーションを通して具体化するので、保育者として必要な教授技術やその他の諸準備を再検討でき、教師としての自己変革をめざすことができる。

以上のことから、保育者養成における教育の理論と実践との統合のための一方法として、三方法を組み合わせたシミュレーションを使うことができそうである。今回の試行は、就職前の学生が対象であったが、この方法は、教育実習前のポイントの明確化や教育実習後の整理・確認のためにも適用できそうであり、さら

に、園内研修（現職教育）にまつても適用可能であると考えられるので、今後の研究を深めようとした。

阿部智江（青山学院女子短期大学）  
志賀政男（青山学院大学）

【参考文献】

- Allen, D.W. & Ryan, K.A. (1969) *Microteaching*. Addison-Wesley; (笹本・川合訳) インシロナーチンン教授技術の新しい研修法、協同出版、東京
- Bandura, A., Ross, D. & Ross, S.A. (1963a) Imitation of film-mediated aggressive models. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 66, 3-11.
- Bandura, A., Ross, D. & Ross, S.A. (1963b) Vicarious reinforcement and imitative learning. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 67, 601-607.
- Borg, W.R. et al. (1970) The minicourse: A A microteaching approach to teacher education. Macmillan Educational Services, California.
- Kersh, B. Y. (1961) The classroom simulator: An audiovisual environment for practice teaching. *Audiovisual Instruction*. 447-448.

Kersh, B. Y. (1962) Simulation with controlled feedback: A technique for teaching with the new media. Teaching Research Division. *Oregon State System of Higher Education*.

Kersh, B. Y. (1963) Classroom Simulation: A new dimension in teacher education. Teacher research Division, *Oregon State System of Higher Education*. (NDEA Title VII. Project No. 866)

Kersh, B. Y. (1965) Classroom simulation: Further studies on dimensions of realism. (title VII, Teaching Research Division, Project No. 5-0848)

Orme, M. E. J. (1966) The effects of modeling and feedback variables on the acquisition of a complex teaching strategy. Doctoral dissertat Stanford University.

大嶋三男編（一九七五）現代教育と情報科学、第一法規、東京

Tansey, P. J. (1971) A Primer of simulation; its methods, models and application in educational processes. In Tansey, P. J. (ed.) *Educational aspects of simulation*. 1-25, McGraw-Hill, London.

# 保育の体験と思索

——子どもの世界の探究(三十二)——

津 守 真

五歳児の後半には、子どもによっては、小学校入学の問題が身近に迫ってきて、不安定になる時がある。ことに、知恵おくれの子どものグループでは、毎年、秋になるとこのことが私共の心を重くする。もちろん、これは親の問題であって、子どもが心配することではないのであるが、親の不安は子どもの生活を動揺させる。

このことは、知恵おくれの子どもの場合に、際立った形で表にあらわれるが、入学や入園を目前にした子どもにも共通のことである。次に掲げるのは、愛育の知恵おくれの幼児のグループで、たまたま私が出会ったことである。

五歳児の後半になって、子どもの調子が良いと思っている間に、急に行動が荒れてくるようなとき、小学校に上れるかどうか心配して、親が子どもの能力以上のことを要求しはじめていることにしばしば気が付く。あちこちに相談にいくたびに動揺し、入学の規準が過大に認識されて、子どもの現状に対する不満がつの

一月二十三日

朝、Uが走って登園してくるのに出会った。玄関の台の上の新



聞を手ではねとぼしてかけてきたので、私は手をひろげて受けとめた。「赤ちゃん、赤ちゃん」と云うので、私は抱いてやると、「プやって」と云って、ほっぺたを差し出す。

この日、ひるま、何回か他の子どもの髪の毛を引張った。

きょうは、母親がUを小学校入学の面接につれてゆくので、いつもより早く迎えにきた。Uは母親をみると、「公園」と叫んで、母親を部屋の外に押しやり、「バイバイ」を云う。私は、少し気をまぎらわしてからつれてくるからと云って、Uを抱く。Uは戸口の鍵をかけてくれという。

庭にかけ出してゆくので私も一緒に出る。すべり台を何度もすべる。しばらくやってから、私は、「もう一回滑ったらかえろう」と云うがかえろうとしない。「せんせいはかえるからね」と云って部屋の方に歩いてくると追いかけてくる。私はUを抱いて母親のところにつれてゆく。母親は洋服をむりにぬがせると、Uは母親の髪を引張ったり、つねったりして、母親も本気になって怒る。それでもようやく着かえさせると、母親は「みんなもさよならだからね」と云うので、私は母親と一緒にさよならの歌をうたうと、一人で廊下に出てゆく。驚いたことに、その顔は、涙をぼろぼろ出して泣いている。本当に悲しそうに泣いている。私はUの泣き顔を見たのは、はじめてであった。

### 手にふれるものをはねのけて走る

朝、登園してきたとき、Uは玄関の台の上の新聞をはねのけて走ってきた。Uにとっては、手にふれたものは、新聞であろうと、何であろうと、ふり払い、はねのけるのであった。何もかも気に入らない様子だった。しかし、私が廊下で手をひろげると、意外にも、すっぽりと腕の中に入ってきた。「赤ちゃん」と云い、「プやって」と云ってほっぺたを差し出したので、私はほっぺたに唇をつけてやると嬉しそうであった。こういうときの子どもの肌ざわりは、柔らかく心地よい。

そのあと、何回か他の子どもの髪の毛を引張った。新聞をはねのけて走ると類似の行動である。この日のUの内面は、何か荒れていることが私には感じられた。

## 涙を流したこと

この日の最後に、Uが涙をぼろぼろ流し、顔を涙でくしゃくしゃにしているのを見たときに、それは予期していなかったことなので、私は驚いた。もっと遊んでいたかったのか、母親と帰るのが嫌だったのか、小学校入学の面接にゆくのがいやだったのか、あるいはもっと他の理由なのか、恐らくその全部が関係していたと思うが、私はUの泣き顔を見たのは三年間の中ではじめてであったことから考えると、この日の特殊事情である。小学校入学の面接が大きな関係をもっていたと思う。

知恵おくれの子どもたちは、その生育歴の中で、何度も病院や相談所につれてゆかれたことがあるのが普通である。そのたびに、知恵はおくれていても、さまざまな体験をしているに違いはない。まだこんなことができないと自分のことが語られ、また親の嘆きを見る。ことばを話すことのできない子どもでも、自分のことが高められて語られているときと、低められて語られているときでは、違った感じ方しているだろうと思う。

一般には、ことばを話さない子どもが、おとな同士の会話を理解するはずがないと思われがちである。しかし、よく注意してみると、おとなの考えていることは、表情や微妙な動作にあらわれ

ている。子どもの存在を、喜ばしく思い、親が誇らしく思っているとき、おとなは微笑み、目は優しく、差し出す腕はゆるやかに伸びている。その子のすることが気に入らず、その子の存在を名譽なことと思っていないとき、おとなが子どもに向ける身体全体は緊張し、子どもは自ら表情は厳しくなるであろう。ことばを話さない子どもでも、周囲のおとなが自分を受けいれてくれているかどうかは、全身の感覚を通して察知している。ときによると、子どもが何にも反応を示さない場合にも、それはおとなの評価する眼から自分を守るために、わざと反応を拒んでいることもある。

相談や検査、面接などにつれてゆかれるたびに、こうした体験をしている子どもたちが、入学のための面接にゆくの嫌がるのは当然とも云えよう。Uが涙を流して泣いたのには、自分が精一杯のことをしても、受けいれてくれない社会に対する悔やしさを怒りや、悲しさなどが含まれているのであろうと思う。

ここで私が考えていたことの輪郭を辿ることができなくて苦心していた夜、私は夢を見た。夢の話をおんなところに挿入することは本論と無関係と思われるかもしれないが、ここで考えている

のは私であり、夢の中である感情を体験しているのも私であるから、私は連続した作業をしているのである。今までにも、同様のことはあるが、今回は敢てこのことを記す次第である。

私は娘をつれて、遊園地でメリーゴーランドを見ている。娘はもっとよく見たいと云い、私は娘を抱きかかえて、ぐるぐる回るメリーゴーランドを、人ごみの頭ごしにようやく見せてやる。私は目を覚まして、娘を抱きかかえて見せてやったときの、身を乗り出していたあの喜びと、ようやく支えながら望みを叶えてやったときの温かい感触とを体の中に感じていた。朝、起きてから、高校生の娘にその話をする、娘はニヤと笑って、「あたし、お父さんとメリーゴーランドにいったことあるよ」と云った。きつとこの感覚を実際に、お互いに何度も味わったことがあるのだと思う。幼い子どもとの間に体験するあの柔らかな感覚である。知恵おくれや情緒障害児といわれる子どもも、実際に保育をする、この感覚においてかわりはない。もっと純粹にその喜びを示してくれることもしばしばである。Uも情緒障害児と診断されてきた子どもである。

どの子どもも、身近なところで自分自身の望みをもち、それが叶えられることを求めている。学校や幼稚園でも、他の子どもと比べるとやや幼稚な段階で、この子どもたちはおとなとゆっくり

と交りつつ、物と交わることのできる生活を求めている。それを理解されずに、能力の程度や情緒の安定度によって評価されるとき、子どもはおとなとの間の平和な感覚を失い、荒れた行動を示す。

こう云っても、私は、知恵おくれの子どもや情緒障害児がすべて普通学級に入れるようになれば問題が解決するとは思わない。今よりもっと普通の幼稚園や学校で受け入れられればよいと思う。けれども、そこでその子どもたちに応じて満足のゆく生活が与えられなければ、彼らは決して幸せにならないだろう。どんな種類の幼稚園や学校であろうと、おとなからの評価の目を感じることなく、子ども自身が安心して、満足のゆく生活できる場を備えることがたいせつなのだと思う。

## 母親を押し出す

母親には子どもの気持が分らないではないだろう。むしろ、子どもと一緒にあって悔やしく思い、悲しく思う。しかし、それでもなお、少しでも人並みに見られたい気持がはたらく。そこには

母親の内心の葛藤がある。それが子どもには煩わしく感じられるかもしれない。母親と一緒の空間にはいれば、母親の期待に沿わなければならない。それに伴う葛藤に巻き込まれる。その煩わしさから逃れるかのように、子どもは母親を押し出して戸口に鍵をかけることを要求する。Uは母親を部屋から押し出すことによって、自分自身の独立の空間をつくろうとする。今や、子どもは自分の力で、思うように遊ぶことの方が好ましくなったのである。

母親を押し出した後、子どもは屋外をかけまわり、滑り台の上から下を見おろし、スピードですべりおろすことをくり返す。

五歳児の後半には、知恵遅れの幼児のグループでは、こうした姿がしばしば見られる。母親から離れて自由に遊べるようになるまで、何カ月も、時には、一年も二年もかかって後、ようやく自分で遊べるようになる子どももある。自分で思うように身体を動かし、精神を働かせることを獲得した子どもは、その喜びの方を選ぶ。母親を外に押し出し、いつまでも遊んでいて降りたがらない。

母親の側について云うならば、子どもが求めてくるときには腕の中に抱き入れるのであり、子どもが自らの道を見出して何かをしはじめたときには、後を追わず、干渉しないのが自然である

う。

五歳児の後半は、幼稚園生活の中でも、子どもたちが最もよく遊べる時期である。しかしまた同時に、小学校入学の準備のために、親も子も生活を乱されることの多い時期である。知恵遅れの子どもにその典型を見たが、普通の子どもにも、その内心に、同様のことが起っているのであると思う。

(つづく)



「小学校三年生から後のことはよく覚えてるけど、その前のことはみんな忘れちゃった。」

少年はこう言うと、屈託なげに笑った。そして、こうつけ加えた。

「でも、Yちゃんもやっぱりあの幼稚園に入れた方がいいよ。だって、あそこ、僕の幼稚園だもの。」

少年は、きっぱりとそう言い切って、いま一度、爽やかに笑った。

子どもたちは、いつも前を向いて駆け出していく。短い足で、精一杯に……。

彼らは、「早く大きくなりたい」と一生懸命だから、後をふり返るいとまなど持ち合わせないのかも知れない。

巣立ちの春、今年も、子どもたちは、決然と小さな背中を見せて去って行くこうとしている。こんなとき、残される者たちは、「いつまでも健かであれ」と祈る

以外に何が出来ると言うのだろうか。

何しろ、この向こうみずの雛たちは、

私どもと過ごした何十倍もの時間を、これから、飛び続けようとしているのだ。

しかも、未知の大海、未踏の大地の上を……。せめて、私どものささやかな祈りが、彼らを人知れずため、そのぬく

もりのゆえに、それぞれが凍えることなく己れの旅を続けることが出来るように……。

子らを送るとき、大方の保育者の胸を

よぎるのは、こんな想いではないだろうか。それにしても、何と控え目で、何と慎ましい願いであることか。

然し、子どもたちの中に、そのぬくもりがよみがえるとき、彼らは、人知れず、先の少年と同じつぶやきを口にするだろう。

「何にも覚えてないけど、でも、あそこは、僕の幼稚園だ」と。(本田和子)

## 幼児の教育 第七十九巻 第三号

三月号 © 定価二五〇円

昭和五十五年 二月二十五日 印刷  
昭和五十五年 三月 一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館  
振替口座東京九一九六四〇番

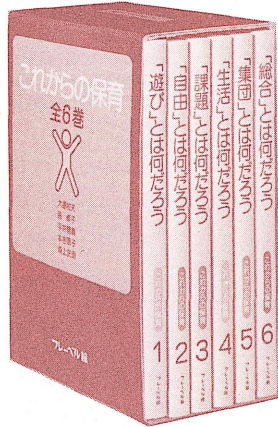
© 本誌御購読についての御注文は発売所  
所 フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

好評発売中!!

# これからの保育 全6巻

大場牧夫 海 卓子 平井信義 本吉園子 森上史朗 共著



A5 軽装判・各256頁・セットケース入り

セット価格(全6巻) 9,600円

平易な文章で語りかける全6巻。保育の実例や座談会などが豊富に入っていて、読みやすさ抜群です。

若い先生も、ベテランの先生も、原点に立ってもう一度“保育”を考え、基本的な問題を考えるために必読の書です。

## 内容一覧

### 第1巻 〈これからの保育1〉

#### 「遊び」とは何だろう

- 1 章 遊び遊びというけれど
- 2 章 遊び・学習・仕事・労働
- 3 章 お遊びと遊びのちがひ
- 4 章 遊びに課題は不要?
- 5 章 遊びと生活環境
- 6 章 遊びを育てる保育者

(付録) フレーベルのとらえた遊びとは

### 第2巻 〈これからの保育2〉

#### 「自由」とは何だろう

- 1 章 保育者の好きな自由ということば
- 2 章 自由という名の不自由保育
- 3 章 くさりにつながれた子どもたち
- 4 章 自由についてもう一度
- 5 章 子どもの発達をみつめながら
- 6 章 遊びの中の自由とは

### 第3巻 〈これからの保育3〉

#### 「課題」とは何だろう

- 1 章 課題について考えよう
- 2 章 大きな課題と小さな課題
- 3 章 子どもは課題をどう受けとめるか
- 4 章 遊びから課題、課題から遊びへ
- 5 章 大切な家庭との関係プレー
- 6 章 受身にさせない課題の与え方
- 7 章 子どもの生活の中から

### 第4巻 〈これからの保育4〉

#### 「生活」とは何だろう

- 1 章 子どもたちの生活をみつめる
- 2 章 園も生活の場所
- 3 章 子どものための子どもの生活
- 4 章 子どもたちの生活をつくるために
- 5 章 感動ある生活を求めて
- 6 章 園・家庭・地域そして生活
- 7 章 保育者の生活感

### 第5巻 〈これからの保育5〉

#### 「集団」とは何だろう

- 1 章 個と集団について考えよう
- 2 章 園という集団の中で
- 3 章 まず、個からはじめよう
- 4 章 型にはめない集団づくり
- 5 章 問題児というレッテル
- 6 章 問題児を生む保育者

### 第6巻 〈これからの保育6〉

#### 「総合」とは何だろう

- 1 章 総合のとらえ方、考え方
- 2 章 総合活動と子どもの要求
- 3 章 広がり、深まり、まとまり
- 4 章 総合のとらえ方とカリキュラム
- 5 章 保育の中の総合活動
- 6 章 系統と発達のすじみち
- 7 章 保育の流れと系統性

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所、または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館



大きく伸びゆく お子さまのために…  
フレーベル館の **月刊7誌**



創刊



年長児のための新しい総合絵雑誌  
キンダーメイト  
おそろ おかあさんもいっしょに  
団体購読価 月 300円

豪華な上製本



科学する心を育て自然に親しませる  
しぜん—キンダーブック③  
4月号「なのはなとむし」  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 月 300円

豪華な上製本



幼児の美しい心を育てる  
キンダーおはなしえほん  
4月号「おかあさんのふえ」  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 月 300円

ワイド画面付



情操をゆたかにし創造力をのばす  
キンダーブック①—情操  
4月号「むくの おさんぼ」  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 月 200円

ワイド画面付



観察の眼をそだて心情をゆたかにする  
キンダーブック②—観察  
4月号「はるを みつけた」  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 月 200円

特製厚紙製本



幼児らしい夢をそだてる絵本  
キンダーメルヘン  
4月号「があこちゃんの たんじょうび」  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 月 200円



保育の実践に協力する  
保育専科—今月のカリキュラム—  
4月号  
特集 80年代・私の保育ビジョン  
定価 350円